

ロータリーの 希望

— 「奉仕の理念」と
その実践をめぐる —

国際ロータリー第2840地区(群馬)

2013-2014年度

ガバナー 本田 博己
(前橋ロータリークラブ)

目次

はじめに	2
第 1 章 ロータリーの目的は4つある？	3
第 2 章 「奉仕の理想」ってどういう意味？ そして、「超我の奉仕」とはどんな関係が？ ～「奉仕の理想」をめぐる その1～	5
第 3 章 「奉仕の理想」はあくまで「理想」でしょ。 でも「現実」は厳しいよね！？ ～「奉仕の理想」をめぐる その2～	9
第 4 章 「四大奉仕」がどうして「五大奉仕」になったのか？	13
第 5 章 「職業奉仕」はロータリーの根幹か？	17
第 6 章 ロータリーの原点とは？	22
第 7 章 ロータリーは「アイ・サーブ」“I Serve”か？ — ロータリーの二元論を克服しよう —	25
第 8 章 ロータリーはなぜリーダーシップという言葉 を多用するのか？ — リーダーシップとインテグリティ —	29
第 9 章 ロータリーは時代遅れか？ — ロータリーの理念と組織をめぐる —	33
第 10章 奉仕は他者のため？ 自分のため？ — 究極の利他主義としての「奉仕の理念」 —	37
第 11章 会社は営利を目的としているのか？ — 試金石としての「奉仕の理念」 —	41
第 12章 ロータリーに希望はあるのか？ (終章) — ロータリーの希望を語ろう —	44
あとがき	48

はじめに

本稿は、私が国際ロータリー第 2840 地区（群馬）のガバナーを務めた 2013-2014 年度のガバナー月信に 1 年間連載したコラム「ロータリーの誤解・正解シリーズ」を、補筆・修正し、各章に小見出しを付け、構成を整えて編集したものです。

「ロータリーの誤解・正解シリーズ」というシリーズ名は、本稿を取りまとめる際に放棄しました。各章のタイトルがすべて疑問形であるところに、その痕跡が残っています。ロータリーの様々なテーマに関する議論には、「正解」がない場合が多く、逆に「正解」がたくさんの場合もあります。その人の価値観や人生観で「正解」が異なる場合もあるでしょう。ただ、ロータリーの理念・目的・原点・本質・歴史等々に関する日本ロータリアンの伝統的な議論の中には、「誤解」や根拠のない（典拠の不明な）臆見が見られます。

また、ロータリーは、米国発祥で、公式文献の内容や解釈に疑義のある場合はすべて英語原典に基づくことになっていますので、英語の語義や概念と必ずしも一致しないことが多い日本語（邦訳）で、最初から最後まで議論する我々日本人は、ロータリーのグローバル・スタンダードから見ればずいぶんおかしな議論をしているということもあるようです。

本稿では、そうしたロータリーに関する「誤解」を明らかにし、ロータリー理解やロータリーの価値に対する私たちの認識が少しでも深まることができると考えました。私見を押しつけるのではなく、ロータリーについて「正しく問う」、「正しく考える」ためのヒントを示すことが目的です。

私が、ロータリーの英語（原典）と日本語（邦訳）の語義のずれを初めて意識したのは、ちょうど 10 年前の 2003-2004 年度（森田 均ガバナー）に地区会員増強・退会防止委員会委員長を拝命したときのことで、「会員増強」の趣旨を私自身が得心するために、当時の『2001 年版 手続要覧』の「会員増強」に関する記述を英語版と日本語版で比較対照してみました。その時わかったことは、英語の“Membership Development”の訳語としての「会員増強」が必ずしも十分に英語の真意を伝えているとは言えないということでした。

そのとき得られた問題意識と、委員長としての活動の総括を、2004 年 6 月の「ガバナー月信」に寄稿しました。『「会員増強」とは「組織強化」である』というタイトルで、後に『ロータリー文庫』にも収録されましたので、興味のある方は、『ロータリー文庫』のウェブサイトでも検索してみてください。議論の前提としたテキストが『2001 年版 手続要覧』という、今では使われていない過去の文献なのですが、当時の問題意識やロータリーに対する思いは、現在の私のそれと直結しています。

人は生涯、ひとつの調べを奏で続けるものなのではないでしょうか。

第1章 ロータリーの目的は4つある？

「綱領」から「目的」へ

「ギョエテとは俺のことかとゲーテ云い」という戯れ句がありますが、ロータリーでも似たようなことが最近起きました。私たちが長く慣れ親しんできたロータリーの「綱領」が「ロータリーの目的」に変わったのです。

正確には、「変わった」わけではありません。英語原文には一切変更はありません。日本語訳が現代的な新訳に改訂されたのです。それにしても、「綱領」が「目的」へと思いきった改訳です。しかし、原文が“Object of Rotary”ですから、「綱領」としていた旧訳が、むしろおかしかつたと言えるでしょう。

3~4年前に日本全国のロータリアンに行ったアンケートでは、「『綱領』のままでもよいのではないか」という声もあったようですが、英語の専門家も含めた日本のシニアリーダーのチームが、旧訳に厳密な検討を加え、中間報告をロータリー研究会等で繰り返しながら完成させた労作が、この新訳です。

ロータリーの目的 (国際ロータリー定款、標準ロータリー・クラブ定款 第4条)

ロータリーの目的は、意義ある事業の基礎として奉仕の理念を奨励し、これを育むことにある。具体的には、次の各項を奨励することにある：

- 第1 知り合いを広めることによって奉仕の機会とすること；
- 第2 職業上の高い倫理基準を保ち、役立つ仕事はすべて価値あるものと認識し、社会に奉仕する機会としてロータリアン各自の職業を高潔なものにすること；
- 第3 ロータリアン一人一人が、個人として、また事業および社会生活において、日々、奉仕の理念を実践すること；
- 第4 奉仕の理念で結ばれた職業人が、世界的ネットワークを通じて、国際理解、親善、平和を推進すること。

ロータリーの「目的」はひとつ

「綱領」が「目的」に、「奉仕の理想」が「奉仕の理念」に、「世界的親交」が「世界的ネットワーク」に改訳されたことなど、解説が必要な個所もありますが、本章で指摘したいのは、ロータリーの目的（旧・綱領）が4つあると思っている方が多いことについてです。「綱領」に4項目が並んでいるので、その項目のそれぞれが「綱領」として並列されているという思い込みです。

「ロータリーの目的」の原文が“Object of Rotary”と単数であることに注目してください。「目的」（旧・綱領）は一つなのです。4項目の前文のように見え

る最初の 2 行が、実は本文で、ここにロータリーの目的が端的に表現されています。すなわち「意義ある事業の基礎として奉仕の理念を奨励しこれを育むこと」。これがロータリーの目的です。

後に続く 4 項目は、本文の目的を達成するためにロータリアンが如何に行動・実践すべきかが書かれており、いわば本文の補足条項といってもよいでしょう。

「ロータリーの目的」を追加する？

「ロータリーの目的」（旧・綱領）が今の形に定まったのは 1951 年のことです。昔の『手続要覧』には、「四大奉仕部門」は、「綱領」の 4 項目を反映している、というような記述があり、今でもそう解釈するベテランのロータリアンもいらっしゃいますが、今とってみれば、4 項目が「四大奉仕」の定義というには極めて不十分な、または趣旨の違う説明だと、私は考えています。四大（五大）奉仕部門の定義は、標準ロータリークラブ定款 第 5 条 に示されています。

（→ 第 4 章 「四大奉仕」がどうして「五大奉仕」になったのか？）

そうした「誤解」が、今回の規定審議会でも、「目的」の第 5 項目に「新世代奉仕」を加えようとか、「環境保護」を加えるほうが現代の課題にふさわしい、とかの立法案（理事会付託や否決になった）につながっているのです。そういう議論にはきりがありません。

ロータリーの目的は、「奉仕の理念を奨励し育むこと」の 1 点であることが了解されればよいわけで、「ロータリーの目的」に、時代の動向を反映して次々と項目を追加してゆこうとする必要はないでしょう。

それでは、ロータリーの目的である「奉仕の理念」とは一体何でしょうか？

第2章 「奉仕の理想」ってどういう意味？ そして、「超我の奉仕」とはどんな関係が？

～「奉仕の理想」をめぐって その1～

本章は「奉仕の理想」について考えます。「奉仕の理想」がロータリーの核心であるのは間違いないのですが、論点が多く、1章では語り尽せそうもないので、2回に分けて論じます。

「綱領」か？「目的」か？

本題に入る前に、前章で、「綱領」が「目的」に改訳されたという話をしましたが、「綱領のままでいいじゃないか！」と言う方がいらっしゃったので、もう少し詳しく解説しておきます。

ロータリーは、米国発祥なので英語が原典になることは申し上げました。私たちは、普段ロータリーの約束事や手続きについては日本語訳の『手続要覧』を調べて確認するのですが、何を言おうとしているのかよくわからないときは英語版（原典）をチェックすると、文意が了解されることがよくあります。

各国の言語はその国の民族的系統と歴史・文化・宗教等を背景として形成されてきたものです。日本語と英語とは、かなり系統の異なった言語なので、言葉の意味が一对一で完全に一致しているわけではない、と考えた方がよい場合が多いのです。訳語を定めるときには、常にそうした問題を意識せざるを得ません。

訳語に疑問がある場合の第1のチェック・ポイントは、その単語を和英辞典で引き直してみることです。例えば、ロータリーの中核となる価値観のひとつ「親睦」を和英辞典で引いてみても原語の“fellowship”には辿り着けません。

“fellowship”の語意は、「仲間であること、仲間意識、仲間としての親交・友情」ということですから、「親睦」を、夜の飲み会やゴルフ・コンペで親しく付き合うことぐらいに思っている日本人は、“fellowship”を英語で理解している世界のロータリアンとは少し違う受け止め方をしているのかもしれない。

さて、長く慣れ親しんできた「ロータリーの綱領」は、“Object of Rotary”の訳語でした。しかし、「綱領」を和英辞典で引いても、“platform”とか“creed”が出てくるだけで、“object”には辿り着きません。ロータリーの文献では、“object”は、“purpose”や“aim”と同意義で用いられてきました。

「ロータリーの綱領は、有益な事業の基礎として奉仕の理想を鼓吹し、これを育成することにある。」となっていた旧訳より、「ロータリーの目的は、意義ある事業の基礎として奉仕の理念を奨励し、これを育むことにある。」と改訳した新訳の方が、ロータリーにとって最も重要な目的がここに明記されていることがはっきりする

ので、適訳であるといえるでしょう。『2013年 手続要覧』の日本語版から新訳のみが公式日本語訳となります。

「奉仕の理想」とは何か？

いよいよここからが本章の本題です。新訳「ロータリーの目的」では、「奉仕の理想」は「奉仕の理念」と改訳されています。この改訳については、いささか議論のあるところですので、しばらくは、私たちに馴染みのある「奉仕の理想」という訳語のまま見てゆきましょう。

今回の新訳で明瞭になったことは、ロータリーの目的は、「奉仕の理想」を奨励し育てること、の1点であるということです。このことは前章で申し上げました。「奉仕の理想」“The Ideal of Service”がロータリー理念の核心を示す言葉であるのなら、「奉仕の理想」の意味がわかれば、ロータリー理念の理解は容易になるはずですが、ところが、「奉仕の理想」の意味をきちんと説明したロータリーの文献がなかなか見当たらないのです。

これまで、RIの『公式名簿』(Official Directory) 巻末に記されていたチェスレー・ペリーの言葉「全世界のロータリークラブは一つの基本理念—『奉仕の理想』を持っている。それは**他人のことを思いやり、他人のために尽くすこと**である。」が「奉仕の理想」の意味を示した唯一の記述とされていました。そこで、「奉仕の理想」の意味を解説するときには、これまではどなたもこの言葉を引用してきたのです。

『目標設定計画』に書かれた「奉仕の理想」の意味

ところが、ずっと古い文献、「奉仕の理想」という言葉がロータリーでキーワードとして盛んに使われ始めた頃に、「奉仕の理想」の意味を説明した記述を見つけました。

それは、1931年にRIが発行した『目標設定計画』(The Aims and Objects Plan)というパンフレットの中にありました。このパンフは1927年に決まった四代奉仕部門の意義と適用の方法を解説したものです。(「四大奉仕部門」の意義については、第4章で解説します)

そのパンフの中で、「ロータリーでは、これまで“The Ideal of Service”の意味するところを様々な言い方で表してきました」として、以下の4つの言葉を列挙しています。(原文24ページ)

一つめは、ロータリーの第1モットーである「**超我の奉仕**」“Service Above Self”。二つめは、同じく第2モットーである「**最も良く奉仕する者、最も多く報いられる**」“He Profits Most Who Serves Best”。三つめは、「**他者への思いやり**」“thoughtfulness of others”。四つめは、「**人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい**」“most of all treating others as one

would like to be treated” という、聖書にある言葉です。

当時のロータリアンは、「奉仕の理想」“The Ideal of Service” を、以上4つの言葉を包含した意味に理解していました。あるいは、4つの言葉は、彼らにとって、「奉仕の理想」の内容を示す同意義の言葉であったともいえます。

3つめと4つめの言葉を先に解説しましょう。

「他者への思いやり」という言葉は、これまで多くの方が引用されてきた『公式名簿』巻末のチェスレー・ペリーの言葉、「他人のことを思いやり、他人のために尽くすこと」と同意です。

四つめの「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」という言葉は、聖書の「マタイによる福音書7章12節」の通称「黄金律」と呼ばれる有名な一節です。この「黄金律」と同様な思想や表現は、キリスト教だけではなく世界中の宗教や古代思想の中にも見られます。

ロータリーのモットー（標語）

さて、一つめと二つめに戻ります。一つめと二つめ言葉は、それぞれ、ロータリーの第1モットー、第2モットーとして知られています。

第1モットーは、「超我の奉仕」“Service Above Self”。そして、第2モットーが、アーサー・F・シェルドンの言葉で知られる「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」“He Profits Most Who Serves Best”です。ここで重要なのは、初期のロータリアンが、この二つのモットーが「奉仕の理想」の意味を表していると認識していた、ということです。

この二つのモットーの日本語訳については、昔から議論がありました。特に、第1モットーの「超我の奉仕」は「超我」が造語でもあり、カッコよいが意味がよくわからない、といわれていました。日本のロータリーの創始者である米山梅吉翁は、これを「サービス第一、自己第二」とか「自己に先立つサービス」と訳しました。「超我の奉仕」より原義が伝わるといいます。第2モットーも、「最善のサービスをすれば、結果として最大の利益が得られる」とでも訳したほうがわかりやすいでしょう。

この2つのモットーは1950年のデトロイト国際大会で公式モットーとして採択され、1989年の規定審議会で、それぞれ第1モットー、第2モットーとして別々に示されることになりました。そして最近では、モットー（標語）といえば、第1モットーの「超我の奉仕」“Service Above Self”だけを示すようになっています。

二つのモットーを一体化して捉える

しかし、初期ロータリアンは、二つのモットーを「奉仕の理想」の意味を示す同意義の言葉として理解し、二つのモットーを一体のもの（セット）として

見ていました。

アーサー・F・シェルドンのスピーチ原稿（『ロータリーの哲学』1921）では、モットーを一つのモットー（a motto）として“Service Above Self—He Profits Most Who Serves Best”と一体化した形で示しており、ロータリーの奉仕概念の真髓を、この「一つのモットー」の中の“Service” “Self” “Profit”という3つの概念の本質とそれらの関係を説明することによって浮き彫りにしようとしています。

「決議23-34」（1923年）でも同様に、この二つのモットーは、セットで示されています。

決議23-34 第1条

ロータリーは、基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情とのあいだに常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は奉仕—「超私の奉仕」—の哲学であり、「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という実践倫理の原理に基づくものである。

二つのモットーを全体として一つの主張として捉えると、ロータリーモットーの真意は次のようになると考えられます。

サービスを自己の利益や都合より優先させよう。利益はサービスの結果である。相手のために最善のサービスをすれば、結果として最大の金銭的な利益と、大きな精神的満足が得られる。

ここで主張されている思想こそ、「奉仕の理想」の核心です。そして、注意しなければならないのは、これは決して利益を求めて奉仕するという「功利主義」的な思想ではなく、他者のために尽くすことが自らの幸せ（喜び）であるという、他者に奉仕すること自体を目的とする「利他主義」の思想だということです。究極の「奉仕の理想」とは、利己と利他の矛盾などない、利己と利他が完全に一致する状態だといえるでしょう。

本章では、「奉仕の理想」の意味について、ロータリーモットーとの関係に触れながら解説しました。ロータリーの重要概念とされている「職業奉仕」や「四大奉仕」の意義について議論する前にロータリーの中心概念である「奉仕の理想」についての理解を深めておきたかったからです。なぜ中心概念かといえば、ロータリーの目的は「奉仕の理想」を奨励し育むこと、だからです。

次章では、「奉仕の理想」の訳語の問題、そしてロータリーの「奉仕」の意味について、さらに考察を進めます。

第3章 「奉仕の理想」はあくまで「理想」でしょ。 でも「現実」は厳しいよね！？

～「奉仕の理想」をめぐって その2～

「奉仕の理想」か？「奉仕の理念」か？

前章では、「奉仕の理想」の意味について、ロータリーモットーとの関係に触れながら解説しました。本章は、訳語として「奉仕の理想」が適訳かどうかを見てゆくことから話を始めます。

旧「綱領」の新訳「ロータリーの目的」では、“The Ideal of Service”を「奉仕の理想」から「奉仕の理念」に改訳しています。「Ideal」は『理想』としか訳せない。なぜわざわざ『理念』と訳し変えたのか？」と疑念を呈する方がいらっしやいました。このご意見は、確かに一理あります。「綱領翻訳問題委員会」が数年前に全国ロータリアンに行ったアンケートでも、「奉仕の理想」のままでもよいと考えている人が7割近くもいたようです。

前章で、訳語の適否を判定する第1のテストは、訳語を和英辞典で引き直してみることで申し上げましたが、「理想」を引くと、確かに“Ideal”が出てきますので、この点では、「理想」という訳で何の問題もないようです。

適訳かどうかをチェックする第2のテストは、訳語を国語辞典で、原語を英英辞典で引き、語義を比較して見ることです。英語と日本語の意味のずれを、そこから読み取るのです。

訳語の「理想」は、『岩波国語辞典』（第5版）では、「考えうる最も完全なもの。(ア) 最善の目的。(イ) 理念。イデー。」と説明されています。独創的な語釈で有名な『新明解国語辞典』（第7版）では、「実際には実現出来ないとしても、理念としては追求し続けるところの、最も望ましい状態」として、対義語に「現実」を挙げています。

「理念」は、『岩波』では、「ものの原型として考えられる、不変の完全な存在。イデー。イデア。」、『新明解』では、「何を最高のものとするかについての、その人（面で）の根本的な考え方。」となっています。

一方、原語の“Ideal”は、『Oxford Dictionary of English』では、“a person or thing regarded as perfect” “a standard or principle to be aimed at”。『コウビルド英英辞典』では、“An ideal is a principle, idea, or standard that seems very good and worth trying to achieve” “Your ideal of something is the person or thing that seems to you to be the best possible of it”。『ロングマン現代英英辞典』では、“a principle about what is morally right or a perfect standard that you hope to achieve” “a perfect example of what something should be like”

というような語義が並んでいます。

いかがでしょうか。日本語の「理想」と英語の“Ideal”には少し語義のずれがあるようです。

「理想」には「実際には実現出来ない」（『新明解』）、「現実的ではない」というニュアンスがあるのですが、“Ideal”は、「実際に目標とすべき、また達成すべき原則や観念や規範」という語義が中心です。もう一度和英辞典（『ジーニアス和英辞典』）で「理想」を確認すると、“ideal”と並んで“dream”が載っています。

新訳は、「理想」という日本語が持っている「夢のような」「非現実的な」というニュアンスを嫌って、「理念」と訳し変えたのだと思われます。実際、英英辞典の“Ideal”の語義は、「理念」という日本語に近いと思われます。

本稿では、今後新訳に従って「奉仕の理念」という訳語を使いますが、実は、私は“The Ideal of Service”を「奉仕の理念」と訳しただけでは、まだ原語の意味が十分に表現できていない、と考えています。

原語には“The Ideal”と定冠詞“the”が付いています。これは、“The Ideal of Service”が「ロータリー固有の」観念であることを示しています。また、“Service”を「奉仕」と直訳しただけでは、ロータリー固有の“Service”の意味には辿り着けません。

私は“The Ideal of Service”を、仮に「**ロータリーが考え実践してきた究極の“Service”のかたち**」と言い換えています。これでは、訳語としては成立しませんね。「奉仕」と直訳できない、ロータリーの“Service”とはどういう意味を持っているのでしょうか。

“Service”とは何か？

ロータリー独自の“Service”概念を確立したのが、「ロータリーの哲学者」といわれ、ロータリーの第2モットー「最も良く奉仕する者、最も多く報いられる」の作者で知られる、アーサー・フレデリック・シェルドンです。

シェルドンは、1921年「ロータリーの哲学」というスピーチ原稿の中で、ロータリーの“Service”の意義を詳しく論じています。

シェルドンは「ロータリーの哲学は、Serviceの哲学である」と主張します。そして、シェルドンは、“Service”と“Profit”とは、原因と結果の関係にある、と言います。“Service”があるから“Profit”が生じる。“Service”が先で、“Profit”はその結果である、と言うのです。

原因としての“Service”は、「正しい質」・「正しい量」・「正しい行動様式」で構成されており、一方、結果としての“Profit”は、仲間からの尊敬や自尊心の満足といった精神的な充実感と、物質的・金銭的な利益の両面を意味しています。

シェルドンの言葉は金銭的な利益を求める功利主義と誤解されることがある（特にイギリスのロータリアンから）のですが、“Profit”が単に「金銭的な利益」を指しているのではないこと、利益は目的ではなく結果であることがこのスピーチ原稿を読むとよくわかります。

それでは、シェルドンの言う“Service”の「正しい質」・「正しい量」・「正しい行動様式」とは、具体的には何を指しているのでしょうか。それは、「高い品質、適正な価格」「豊富な品揃え」「経営者・従業員の適切な接客態度」「公正な広告」「豊富な商品知識、高度な専門知識」「十分なアフターサービス」といった、現代企業が顧客の信頼を得るのに必須の「サービス」と異なりません。

1927年、「四大奉仕」の枠組みが確立し、以来「職業奉仕委員会」と呼ばれるようになった前身の委員会は、“Business Method Committee”という名称で、アーサー・シェルドンがその初代委員長でした。当時、ロータリーにおいて“Service”という言葉は、「正しいビジネスの方法」を示す中核概念だったので

す。「サービス」というカタカナ語は、現代日本では「値引き」「おまけ」「無料」などの意味で使われることが多く、また、「商品」（モノ）に対して人的労力の提供を「サービス」と呼んでいますので、“Service”を「サービス」と訳すのも、「奉仕」と訳すのと同様のためらいがあります。

“Service”が正しいビジネスの方法を意味していたシェルドンの時代から、100年後の現代では、ロータリーの“Service”の分野は広範囲に広がっています。1927年に確立した「四大奉仕」は、2010年には「青少年奉仕」を加えて「五大奉仕」となりました。1985年から始まったポリオ・プラス・プログラムは、“END POLIO NOW”としてポリオ撲滅の最終局面を迎えています。2000年代に入って、国際ロータリーは「戦略計画」を策定し、「人道的奉仕」の分野に重点を置く方向性を打ち出しました。2013年からは、ロータリー財団の「未来の夢計画」も始まりました。

このような現代ロータリーにおいては、“Service”をその最も広い意味で使うようになっています。すなわち、

「社会に役立つ価値を提供すること」

「世のため人のために尽くすこと」

ロータリーは、職業人の集まりですから、その“Service”は先ず自らの職業で発揮されることとなります。それを「職業奉仕」と呼びます。自らの職業のサービスレベルを高め、社会に貢献できるよう努めることが、ロータリアンの最優先課題といってもよいでしょう。

「奉仕の理念」と「ロータリーの目的」

ロータリーの「奉仕の理念」を私なりに要約すれば、世のため人のために自分がもっている能力を全力で心をこめて捧げること、そうした利他の精神が自分の幸せにつながる自分を活かす道である、ということです。

ロータリーの目的は、次のように言い換えることができます。

ロータリーの目的は、「奉仕の理念」を広め、その価値を高めてゆくことである。そして、ロータリアンとは、個人生活・職業生活・社会生活等、人生のすべての面で、「奉仕の理念」の研鑽と実践を行う人である、ということができます。

前章でご紹介した『目標設定計画』(*The Aims and Objects Plan 1931*)というパンフレットの中で、「奉仕の理念」(奉仕の理想)は私たち個人にとって何を意味するか?という問いが、最後に投げかけられています。

「職業奉仕も含めて『奉仕の理念』の解釈は意図的にロータリアン各自およびロータリアンのグループに任されている。その適用は広範で多様な状況、問題、可能性に対応して実行されなければならない。**ロータリアン個人が“私の職業を通じて『奉仕の理念』を適用するとは自分にとって何を意味するのか?”という問いに自ら答えることができなくてはならない。**」

私たちがロータリアンであるとは、一つの生き方を選択したということだと思います。ロータリーの「奉仕の理念」は、どこか遠くにあって仰ぎ見るものではなく、自分の個人生活・職業生活・社会生活の中に実現すべきものでしょう。ロータリーの「奉仕の理念」の実践が、社会の中で自分を活かす道であり、社会をよい方向に導く強い力をもっていることを私たちはもっと信じてよいのではないのでしょうか。

第4章 「四大奉仕」がどうして「五大奉仕」になったのか？

「四大奉仕」という訳語は適切か？

2010年の規定審議会で、『第五奉仕部門、「青少年奉仕」を加える件』（制定案 10-87）が修正採択されました。（「青少年」を「新世代」に修正。2013年の規定審議会で「新世代」から「青少年」に名称が戻った）

このとき、長年馴染んできた「四大奉仕」が「五大奉仕」になったことに違和感を覚え、「四大奉仕がどうして五大奉仕になるのか？ 四大奉仕は四大奉仕ではないか。奉仕部門を追加する必要があるのか？」と疑念を抱いたロータリアンも多かったと思います。

どうして奉仕部門が増えたのか？ まずしばらくは、私たちが慣れ親しんできた「四大奉仕」という言葉について考えてみます。

日本語では、三大〇〇とか、四大〇〇という言い方で、多くの中から代表的な三つや四つを挙げる（ビッグ3、ベスト4など）ことがよくあります。ところが、日本のロータリーで「四大奉仕」と言うとき、この奉仕の4分類は、絶対的・本質的な分類で、変えようがないものとして理解されてきました。

仏教用語に「四大」（しだい）という言葉があります。これは「一切の物体を構成する地・水・火・風の4元素」（広辞苑）という意味で、世界はこの4元素によって成り立っているとされます。日本のロータリーで使われてきた「四大奉仕」の「四大」という言葉の語感もこれに近い気がします。

さて、「四大奉仕（部門）」は、英語では“Four Avenues of Service”と言います。“avenue”は英和辞典（『リーダーズ英和辞典』）では、①並木道、大通り、道路 ②（目的に通ずる）道、（目的の）達成方法、（目標への）接近手段と定義されています。

つまり、「四大奉仕（部門）」は、日本語の語感にある絶対的・本質的な要素としての四つの奉仕部門、というより、奉仕という目的を達成するための手段・方法を分類すれば四つになるということで、「奉仕の4部門」くらいに訳しておけばよかったのかも知れません。

「四大奉仕（部門）」の誕生

今から86年前に「四大奉仕（部門）」が確立したときの経緯を確認しておきましょう。

1927年、ベルギーのオステンド国際大会で『目標設定計画』（*The Aims and Objects Plan*）が採択されました。初期のロータリーにおいては、その活動は例

会内と例会外に分類するだけですが、活動が多岐にわたり複雑化するにつれ、奉仕プログラムを調和する必要がでてきました。クラブの管理運営を奉仕活動の実践に対応させ分類・整理する目的でつくられたのが「目標設定計画」です。

この計画を解説したパンフレットには「目標設定計画は、個々の会員に対してロータリーの理解を助け、日常の活動において奉仕の理念の適用を奨励し、且つ活動プログラムの調和を図ることを目的とする」と書かれています。

この計画の中で提示されたのが、「四大奉仕部門」(The Four Avenues of Service)に分類された委員会構成です。実は、1927年オステンド大会では「クラブ奉仕」「職業奉仕」「社会奉仕」の3部門(「三大奉仕」!)でしたが、翌年の1928年ミネアポリス国際大会で「国際奉仕」が追加され「四大奉仕部門」となったのです。

「目標設定計画」では、クラブの活動を「クラブ奉仕」「職業奉仕」「社会奉仕」「国際奉仕」の4部門に分け、それぞれ委員会を編成します。これにより、クラブの組織と奉仕活動に整合性ができ、運営が円滑になりました。それ以後、この「四大奉仕部門」は、ロータリークラブの管理運営の基本的枠組みとして定着したのです。

最初から「四大奉仕部門」として確立していたのではなく、3部門から4部門になったこと、そして、もともとクラブ管理運営上の分類・枠組みであったことを考えれば、ロータリーの発展や変化に合わせてその枠組みが変わっていてもなんの不思議もありません。

2004年のRI理事会で決定されたCLP(クラブ・リーダーシップ・プラン)に基づく機能別の委員会構成が推奨され始めたころ、「四大奉仕があるのだからCLPなど必要ない!」という声が日本では多かったのですが、「四大奉仕部門」そのものが、86年前のCLPといってもよいのです。

「四大奉仕」から「五大奉仕」へ

2007年の規定審議会で、標準ロータリークラブ定款の第5条に、「四大奉仕部門」の定義が掲載されることになりました。そして、冒頭述べたように、2010年の規定審議会で「青少年(新世代)奉仕」が第五の奉仕部門として加わり、「五大奉仕部門」となったわけです。

ロータリークラブが社会奉仕に熱心に取り組み始めた初期の頃から、ロータリーの青少年に対する関心は高いものでありました。

1927年のオステンド大会で決まった「社会奉仕委員会」の正式名称は“Community Service and Boys Work Committee”でした。標準的なクラブの組織図には、「社会奉仕委員会」の中に4つの小委員会があり、その内3つが青少年に対する奉仕の委員会でした。(「青少年委員会」「障害児童委員会」「育英

基金委員会)」

また、『手続要覧』では、以前から（確認できたのは 1950 年版。それ以降の版はすべて）「青少年に対する奉仕」（Service to Youth）は「社会奉仕」とは別の章立てで記述されていました。2010 年規定審議会で「青少年（新世代）」が奉仕部門に加わったのは青少年奉仕の長い歴史を踏まえた現状追認と言ってもよいでしょう。

「五大奉仕部門」はクラブの活動の枠組み

ところで、「ロータリーの目的」（綱領）が、『国際ロータリー定款』と『標準ロータリークラブ定款』の両方に採用されている（第4条）のに、「五大奉仕部門」は、なぜ『標準ロータリークラブ定款』にしか載っていないのでしょうか。

それは、「五大奉仕部門」が「個々のロータリークラブの活動のための枠組み」“framework for the work of this Rotary club”であるからです。

実際、『標準ロータリークラブ定款』の第5条「五大奉仕部門」の各部門には、ロータリークラブ会員が各奉仕部門で行うべき行動・活動が示されています。

第一部門の「クラブ奉仕」はクラブの機能を充実させるためにクラブ内で会員が取るべき行動を、第三部門の「社会奉仕」はクラブの所在する地域社会で会員が行うさまざまな取り組みを、第四部門の「国際奉仕」は他国の人々を助けることを目的としたクラブの活動やプロジェクトを、第五部門の「青少年奉仕」は青少年交換・ローターアクト・インターアクト・RYLA などの青少年奉仕プログラムを推進することを求めています。

第二部門の「職業奉仕」については、いささかややこしい議論が必要ですので、次章に譲ります。

いずれにしても、五大奉仕部門は、クラブの活動のための枠組みなのです。『標準ロータリークラブ定款』の日本語訳では、「第5条 五大奉仕部門 ロータリーの五大奉仕部門は、本ロータリークラブの活動の哲学的小よび实际的な規準である。」となっています。私は、「实际的な規準（framework）」ではあっても、「哲学的な規準」であるとは言えなくなっているのではないかと考えています。

奉仕部門はさらに増えるのか？

2013年の規定審議会で、「ロータリーの目的（綱領）」に項目を追加しようとする提案が3件ありました。「ロータリーの綱領に、青少年の参加と育成に関する第5項目を追加する件」（13-64）、「ロータリーの綱領に新世代の奉仕と育成に関する第5項目を追加する件」（13-65：川口西 RC 提案）、「ロータリーの綱領に環境保護に関する第5項目を追加する件」（13-66）の3件です。

これらは、少しおかしな提案ではないかと思えます。これは、「ロータリーの

目的（綱領）」に示された4項目と「四大奉仕部門」がイコールである、あるいは、関連している、とする「誤解」からきています。

「ロータリーの目的（綱領）」は、奉仕の理念を奨励し育むことの1点であることは、第1章で申し上げました。「ロータリーの目的（綱領）」にある4項目が、「四大奉仕部門」の各部門と一対一で対応しているわけではありません。

「ロータリーの目的」は、ロータリーが組織として意図すること、目指すべき目標を表明したもので、私たちが最も拠りどころとすべき根本方針です。「目的」に、時代によって変化してゆくであろう活動の詳細を記述したり追加したりする必要はないと思います。

一方、「四大奉仕部門」は、クラブの活動の枠組みですから、時代の変化に合わせて、追加修正があってもよいのです。実際、最初は「三大奉仕」から始まって現在は「五大奉仕部門」になっているのですが、私は、今後奉仕部門として「環境保全」や「健康問題」などが加わり、「六大奉仕部門」、「七大奉仕部門」になっても驚きません。

次章は、「五大奉仕部門」における「職業奉仕」について、欧米のロータリアンと日本のロータリアンの認識の違いを手掛かりに話を進めます。

第5章 「職業奉仕」はロータリーの根幹か？

少し刺激的なタイトルでしょうか。「職業奉仕がロータリーの根幹なのは決まっているのではないか！」「昔からそのことに異を唱えるロータリアンは、少なくとも日本にはいない！」というような声が聞こえてきそうです。

これまで、ロータリーの「目的」や「奉仕の理念」、「五大奉仕部門」について従来の解釈や解説とは異なる切り口や主張を述べてきたかも知れませんが、本章は、日本のロータリアンが特に大切に考えている「職業奉仕」をとり上げます。

本章だけ読めば、私の言説が奇矯に聞こえるかも知れませんが、響き覚悟で申し上げますが、これまでの章を丁寧に再読していただければ、私の真意はご理解いただけるかと存じます。と、あらかじめ釈明した上で、さあ始めましょう。

「職業奉仕」を一つの奉仕部門に押し込めてよいのか？という疑問

私が「職業奉仕」“Vocational Service”という言葉で、欧米のロータリアンと日本のロータリアンが全く異なる内容を語っていることをはっきり認識したのは、2012年バンコク国際大会の分科会でのことでした。「職業奉仕」は英語だけの分科会でしたので、私がどこまで理解できたかは自信がないのですが、日本のロータリアンは、私たちにお馴染みの「職業奉仕」の理念を熱心に語り、一方、欧米のロータリアンは、「職業奉仕部門」の活動事例を語り、両者は噛み合わないままに分科会は終わったのです。「同床異夢」という言葉が頭をよぎりました。

前章で、『標準ロータリークラブ定款』の第5条に記述された「五大奉仕部門」の各部門は、「個々のロータリークラブの活動のための枠組み」であり、ロータリークラブ会員が各奉仕部門で行うべき行動・活動が示されていると分析しました。

第一部門の「クラブ奉仕」は「行動」“action”、第三部門の「社会奉仕」は「取り組み」“efforts”、第四部門の「国際奉仕」は「クラブの活動やプロジェクト」“club activities and projects”、第五部門の「青少年奉仕」は「活動」「プロジェクト」「プログラム」“activities” “projects” “programs”などという言葉で、具体的に会員やクラブの行動を求めています。

ところが、第二部門の「職業奉仕」は、記述が他の部門とは明らかに異質です。「奉仕の第二部門である職業奉仕は、事業および専門職務の道徳的水準を高め、品位ある業務はすべて尊重されるべきである」という認識を深め、あらゆる職業に携わる中で奉仕の理念を実践していくという目的を持つものである。会員の役割には、ロータリーの理念に従って自分自身を律し、事業を行うこと

が含まれる。」（『標準ロータリークラブ定款』第5条 五大奉仕部門 第2節）この記述が「誤解」の元となっています。

私は、かつて「四大奉仕」の中でも「職業奉仕」は、具体的な奉仕活動を求める他の奉仕部門とは違い、奉仕の理念の職業への適用を謳った「ロータリーの目的」の第2項目に通ずる、他の奉仕部門の上位概念のようなものではないかと思っていました。「四大奉仕」の一部門に収まっていることがおかしいと。

一つの奉仕部門としての「職業奉仕」

しかし、どうやら日本以外(?)の世界のロータリーでは、当然のように「職業奉仕」を他の奉仕と並ぶ、一つの奉仕部門(an Avenue of Service)として位置付けているようです。

例えば、2005年ごろから推奨されているクラブ・リーダーシップ・プラン(CLP)では、「職業奉仕委員会」は、5つに分類された委員会の一つ「奉仕プロジェクト」の中の1小委員会として、「社会奉仕」「国際奉仕」「青少年奉仕」の各委員会と並んで配置されています。このことに違和感を覚えた日本のロータリアンは多かったです。

3年前から始まった2840地区のロータリー・リーダーシップ研究会(RLI)セミナーの最新テキスト(20周年記念版に準拠)の「職業奉仕」のセッション(パートⅢ)には、「職業奉仕のアイデア」と題する資料が付いています。

そこには、奉仕プロジェクトの1部門としての「職業奉仕」のクラブや会員が行う活動の様々なアイデアが並んでいます。

1. 職場における高い倫理基準を促進する。
2. 職業分類の原則。
3. 高い倫理基準へのロータリーの公約を推進する。
4. 有益な職業の価値を認識し推進する。
5. あなたの職業におけるボランティア活動をする。

この大項目だけではどんな活動内容かわかりにくいでしょうから、「4. 有益な職業の価値を認識し推進する」の小項目を以下に例示します。

4. 有益な職業の価値を認識し推進する

- a. あなたのクラブのプログラムとして、職業分類の話や職場訪問を行う
- b. あなたの職業に関連するロータリー親睦活動に参加したり、新しく組織したりする
- c. ロータリアンが若者の就職を助けるキャリア・デイを後援する
- d. 専門技能の開発を支援する
- e. 事業上の連携における指導的役割を会員が取るように奨励する

- f. 小規模な起業家のためのセミナーを後援する
- g. 会員が地域の専門職の人と出会い、彼らをロータリーに導く、専門職業人のための非公式なネットワーク・イベントを開催する
- h. 失業あるいは、不完全雇用の成人に求人市場で競う必要のある技能持たせるための職業相談プログラムを始める

いかがでしょうか。項目によっては、「こんなものは職業奉仕ではない！」という日本ロータリアンの声が聞こえてきそうです。しかし、世界のロータリーでは、自分の職業上のスキルを生かした奉仕活動は、個人が行うものであれ、クラブが行うものであれ、すべて立派な「職業奉仕」の活動として活発に実践されているのです。

もう一つ、『手続要覧』に載っている「職業奉仕月間」の解説をご覧ください。（『2013年 手続要覧』89ページ）

職業奉仕月間 (Vocational Service Month)

毎年10月の「職業奉仕月間」は、クラブが職業奉仕の理念を日々、実践することを強調するための月間である。この月間中に推奨されるクラブ活動には、地区行事でのボランティアの表彰、ロータリー親睦活動への参加の推進、職業奉仕活動またはプロジェクトの実施、未充填の職業分類に焦点を当てた会員増強の推進などが含まれる（『ロータリー章典』8.030.3.）。

雑誌に見る日米の「職業奉仕」観のずれ

「職業奉仕」という言葉で、世界のロータリアンは、奉仕部門の一つとしての職業奉仕の活動を語り、日本のロータリアンは、「奉仕の理念」の職業への適用やロータリアンとしての職業観を語る。このずれが、大げさに言うと世界のロータリー運動の中で、日本ロータリーの「ガラパゴス化」を招いている一因のように思えます。

先月の『ロータリーの友』（2013年10月号）は「職業奉仕」の特集号でした。冒頭のロン D. バートン RI 会長のメッセージは「職業奉仕を考える」という題で、続いて「職業奉仕 — ロータリーの神髄」と題する特集が組まれています。

その特集では、「私が考える職業奉仕」というテーマで 19 人のロータリアンの投稿が載っています。それぞれの方のロータリー観や職業観はそれぞれに素晴らしいと思いますが、日本でしか見られない「職業奉仕」論であることも確かです。

『ロータリーの友』は日本で発行される地域雑誌です。RI の機関雑誌である『ザ・ロータリアン』（*the Rotarian*）誌 10 月号を見ると、「職業奉仕」についての扱いは素っ気ないものです。ロン D. バートン RI 会長のメッセージの題は、目次に「Using our jobs to serve」とあり、本文も奉仕の第二部門（second

Avenue of Service) としての「職業奉仕」の意義を語っています。他に「職業奉仕」に触れる記事はなく、「職業奉仕月間」に言及しているのは、(10月のカレンダーを除けば) パートン会長のメッセージだけでした。

『ロータリーの友』10月号の会長メッセージ「職業奉仕を考える」という題や特集の副題「ロータリーの神髄」、そして特集そのものも、日本のロータリアン向けに、日本で独自に執筆・編集されたものなのです。

面白いのは、『ロータリーの友』の「職業奉仕月間」の特集記事の最後に1ページだけ、申し訳のようにクラブの職業奉仕活動事例が載っています。我らが2840地区、太田ロータリークラブの「商業高校で出前授業」という記事です。

19人のロータリアンが思い思いに語る日本独自の「職業奉仕」論の後に、世界標準(?)の「職業奉仕部門」活動事例が載っている! 日本における「職業奉仕」論議のガラパゴス化と世界標準との「矛盾?」が現れた誌面のように思うのは私だけでしょうか。

「奉仕の理念」を語ろう!

日本のロータリアンと世界のロータリアンが語る「職業奉仕」が違うことを認識している方は多いかも知れません。ただ、その違いを、日本の「職業奉仕」理解の方が正しいとしたり、「職業奉仕」は他の奉仕部門とは違うとして、クラブの「職業奉仕」の実践を否定したりする態度は、間違っていると思います。

私の提案は、「職業奉仕」という言葉で「奉仕の理念」(の職業への適用)や自分の職業観を語ることをいったん止めてみたら、ということです。そして、クラブの活動のための枠組みである「五大奉仕部門」“Five Avenues of Service”の第二部門(second Avenue)である「職業奉仕部門」の活動だけに「職業奉仕」という言葉を使ってみたら、という提案です。

「職業奉仕」“Vocational Service”という言葉がロータリーで使われるようになったのは、1927年、ベルギーのオステン国際大会で『目標設定計画』(*The Aims and Objects Plan*)が採択され、「四大奉仕部門」がクラブの管理運営の基本的枠組みとなったときからというのは、前章で解説した通りです。

「職業奉仕」という言葉を知らなかった(?)アーサー・F・シェルドンの「Serviceの哲学」を「職業奉仕」で語ったり、“Vocational Service”という言葉から天職論や職業倫理を語ったりする議論は、もともと無理があるのではないのでしょうか。

日本ロータリアンが得意な「職業奉仕論」は、世界では“(Vocational) Ethics”というテーマで論じられています。もちろん、「倫理」“Ethics”がロータリーにとって重要概念であることは世界共通の認識です。

これまでの日本の伝統的な「職業奉仕」論が間違っていると言っているのはありません。むしろ、日本のロータリアンの「奉仕の理念」に対する深い思

索が、ロータリーの世界標準になればよいのに、とさえ思っています。

「職業奉仕」ではなく、「奉仕の理念（奉仕の理想）」“The Ideal of Service”という言葉で、ロータリーの理念についての議論を深めてゆこう、というのが私の提案の真意です。なぜなら、「ロータリーの目的」は、「意義ある事業の基礎として奉仕の理念を奨励し、これを育むこと」であり、「奉仕の理念」がロータリーの根幹であるからです。

私は、この「奉仕の理念」をロータリーの根幹として議論を深めることを、戯れに“ロータリーの大統一理論”と呼んでいます。日本と世界のロータリーが真に共通認識をもって、「同床異夢」ではなく、共通の「希望」を語るができる日が来ることを願っています。

心ある日本のロータリアン諸先達がこれまで培ってきた「職業奉仕」論を、「職業奉仕」という言葉ではなく、「奉仕の理念」という言葉で深めてゆくことが、日本ロータリーの世界標準化への近道であり、日本がロータリー世界に一層貢献する道であると信じています。

（「奉仕の理念」に関する議論は、第2章、第3章をご一読ください。）

追記

本章で、『ロータリーの友』2013年10月号が「日本における『職業奉仕』論議のガラパゴス化と世界標準との『矛盾？』が現れた誌面」とであると指摘しましたが、本章執筆後に発行された『ロータリーの友』2013年11月号に、まさに世界標準の「職業奉仕」の記事が掲載されています。

それは、RI指定記事の「ロータリアンのための職業奉仕入門」という8ページにわたる特集です（横組み35ページ～42ページ）。この特集では、「職業奉仕」は「自分の職業上のスキルを生かしてほかの人々を助けること」と説明され、具体的には、マーシーシップス創設者とのインタビュー、職業研修チーム（VTT）結成・派遣のアドバイス、ロータリー財団補助金活動の評価にあたる専門家グループの紹介等が載っており、「本号で、職業奉仕を実践するアイデアが見つかるでしょう」と結ばれています。

このRI指定記事は、RIの機関雑誌『ザ・ロータリアン』11月号にも掲載されています。目次には、“A Rotarian’s guide to vocational service”というタイトルの下に“Using your professional skills is at the heart of Rotary”とあります。

日本のロータリアンと世界のロータリアンが、ロータリーの核心“heart”である“Vocational Service”という言葉で共通の議論ができる日が一日でも早く来ることを心から願っています。

第6章 ロータリーの原点とは？

ロータリーの根源を成す出発点とは？

「ロータリーの原点とは何か？」という問いに対する答えは百人百様です。109年の歴史を積み重ねてきた巨大な世界的ネットワークであるロータリーには多様な姿があり、一人一人のロータリアンは、それぞれ自身が体験してきたロータリーの一側面を語るからです。

「原点」という言葉を辞書で引くと、① 長さなどをはかるときの基準になる点。② 物事の根拠・根源になる出発点。③ 座標軸の交わる点。(大修館書店『明鏡国語辞典』)と、あります。「ロータリーの原点とは？」という問いの「原点」とは、もちろん②の意味ですが、他の辞書でも「その問題の根源をなすにとらえられる要素」(三省堂『新明解国語辞典』)という語義が載っています。ロータリーの根源をなす出発点・要素としての「原点」として、どんなことが考えられるでしょうか。

ロータリーに「社会奉仕」や「職業奉仕」の概念が定着する以前、ロータリーが相互扶助(Back scratching)から始まったことを大事に思う人は、会員同士の助け合いやクラブの中における「親睦」「Fellowship」が原点だと言います。

創立の1年後に入会したドナルド・カーターに「自分たちのことばかり考えている団体に発展はない」と指摘され、『綱領』(シカゴ・ロータリークラブの目的)に、「会員の事業上の利益の増大」と「会員間の親睦」に加えて、「シカゴ市の利益の推進とシカゴ市への忠誠」、すなわち「地域社会への貢献」の1項が加わったことを重視する人は、「社会奉仕」が原点だと言います。この流れで、シカゴ・ロータリークラブが主導し市民運動にまで広げた、公衆便所の設置運動を原点とする人もいます。

1910年に開催された最初の全国大会で「全米ロータリークラブ連合会」の結成が決まったことが、世界的ネットワークとして発展する「国際ロータリー」の原点とされています。

「奉仕の理念(理想)」や「職業奉仕」という言葉に代表されるロータリーの理念や哲学を原点と考える人もいます。私もその一人ですが、ロータリーの理念・哲学は1910年から1923年頃にかけて、つまり草創期の10数年のうちに確立したと言えます。

初期ロータリーの理念を代表する「決議23-34」を、ロータリアンとしての拠りどころとする人が日本のベテランロータリアンには多くいます

クラブ・リーダーシップ・プラン(CLP)の導入・推進が奨励され始めた2005

年頃、「ロータリーには四大奉仕部門という基本的な枠組みがあるではないか」と反発した多くの日本ロータリアンは、そのとき「四大奉仕」がロータリーの土台だと主張しました。（後に「五大奉仕」になりましたが）

「奉仕」と「親睦」がロータリーの両輪だと言う人がいます。

ポール・ハリスが強調した「寛容」“Tolerance”という言葉がロータリー精神の本質だという人がいます。……

いずれにしても、ロータリーの原点を語る人は、ご自身のロータリー観を語っている。そして、現代のロータリーのあり方に対するそれぞれの問題意識を表明されているのだと思います。ロータリー観や問題意識は人それぞれですので、「原点」についても「正解」はありません。

「原点」に関する思考実験

少し思考実験をしてみましょう。「現代日本の原点は？」という問いにあなたはへと答えますか？ 明治維新、普通選挙法の施行、婦人参政権の成立、太平洋戦争の敗戦、日本国憲法の制定、サンフランシスコ平和条約、等々、その人の歴史観や国家観、世界観によって様々でしょう。

それでは、「あなたの今の生活（人生）の原点とは？」という問いにはへと答えますか？ 敗戦、高度経済成長期、ドルショック、オイルショック、バブル経済の崩壊、オウム真理教による地下鉄サリン事件、リーマンショック、東日本大震災、…。

これも年代や職業、人生観の違いで答えも様々でしょうが、その答えは俄然、極めて個人的色彩を帯びるものとなります。「原点」を語ることは、それぞれのかげがえのない個人的体験を語ることでもあります。

私の原点は…

私の個人的な体験として、これまでの人生で最も大きな出来事は、2011年3月11日の東日本大震災でした。原発事故も含めたあの災害は日本の運命を変えましたが、私の価値観や生き方、人生を変える大きな出来事でもありました。

福沢諭吉が『文明論之概略』（1875）の緒言で「恰も一身にして二生を経るが如く、一人にして両身あるが如く」と感慨をもらしています。自分の体は一つだが、明治維新の前後では、まるで違う二つの人生を生きているようだ、というのです。私も大震災のあの日以後、似た心境で過ごしています。

戦後生まれの私は、恥ずかしながら60歳を過ぎるまで、なんだか節目のないふわふわとした生活を送ってきたような気がします。

私は、あの日以来、ロータリーの世界的ネットワークの力と多くの日本のロータリークラブそしてロータリアン個人の献身的な奉仕に目を瞠る思いで、自分もその中で共に活動してゆきたいと強く願いました。ガバナー就任を打診さ

れたのは、ちょうどその頃でした。

困難に直面している日本社会の中で、ロータリーは社会をより良いものに変えてゆく力と可能性があることを、私はこれからも追求してゆきたいと考えています。

私のロータリーモメント

私のロータリーの原点となった個人的体験（それは私の「ロータリーモメント」（感動体験）でもあるのですが）は、二つあります。

一つは、ロータリーの「奉仕」“Service”や「奉仕の理念（理想）」が、私の経営理念やお客様に対する姿勢と完全に一致することに気がついたときです。

ロータリーの理念をもっと深く理解し、ロータリアンとの交友を広げることが経営者としての成長につながるに違いないと気がついたときから、私はロータリーに積極的に参加するようになりました。入会して3年目のことでした。

もう一つの私の原点は、組織としてのロータリーは、私たちが私たちの意思で変えていくことができることに気がついたときです。入会5年目に、クラブ幹事として『手続要覧』に目を通していたとき、規定審議会の立法案は個々のクラブが提案できる、と記載されていました。

私たちの提案によって、ロータリーの規約や方向を変えることができる可能性があることに、私は興奮しました。今回の2013年規定審議会で、私の所属する前橋ロータリークラブから提案された制定案（13-141）が採択されました。私が『手続要覧』の記述を読んで興奮したときから12年が経っていました。

ロータリーの原点を語ることは、その人の個人的なロータリー観やロータリーに対する問題意識を語ることでもあります。たまには「ロータリーの原点」に関する議論を、ロータリーの仲間と語り合ってみてはいかがでしょうか。

そこから、より深いロータリー理解と仲間との“Fellowship”が得られるのではないのでしょうか。それにしても、個人的体験を語るというのはちょっと恥かしいものですね。

第7章 ロータリーは「アイ・サーブ」“I serve”か？

— ロータリーの二元論を克服しよう —

「アイ・サーブ」の典拠は？

入会当時、ベテラン会員から「ロータリーはアイ・サーブだから、（あまり団体奉仕はしなくてもよいのだよ）」とか、「ロータリーは、ライオンズのウイ・サーブとは違うから、…」とご指導？いただいた記憶があります。

確かに“*We serve*”は、ライオンズの（唯一の？）公式モットーとして知られていますが、一方の“*I serve*”という言葉は、ロータリーの古今の公式文献（『ロータリー章典』、『手続要覧』など）にはどこにも載っていないのです。

ロータリーの古い文献をたどると、これまで私の見た範囲では、二つの文献に“*I serve*”という言葉が出てきます。

一つは、ビビアン・カーターの『ロータリー解析』（*The Meaning of Rotary* : 1927年）です。第1章の章題は「奉仕の理念」“*The Ideal of Service*”となっており、その中に“*I serve*”が出てきます。少し長いのですが引用します。

「ロータリーが奉仕の理念を取り入れた起源を手短に述べようとすれば、その考え方を解説しようとする者は、ロータリアンの *I serve* という信条は、初めてプリンス・オブ・ウェールズがクレシーの戦場に赴いた時に、“*Ich Dien*”と言ったことに端を発する、戦場における日々の生活の中から生まれた言葉であるという事実を強調しなくてはならないだろう。ロータリアンが提唱する奉仕とは、個人の職業において奉仕することである。ロータリアンは奉仕の理念を受け入れて、自らの事業にそれを適用しなければならない。」（田中 毅氏訳）

そして、この前段で、「個々のロータリアンは、会員として入会する前提として、少なくとも、利己的な考え方をする以前に、事業を通じて奉仕をするという原則に立たなければならない」と強調しています。

“*I serve*”という言葉が出てくるもう一つの文献は、1921年のエジンバラ国際大会でアーサー・F・シェルドンがスピーチした『ロータリー哲学』（*The Philosophy of Rotary*）です。その中に「…大英帝国の国策（植民地政策）は、ウェールズ皇太子の紋章（coat of arms）に描かれている『私は奉仕する』というモットーに由来している。」という一節があります。

原文は、“*Ich Dien*”-“*I serve*”となっていますから、先のビビアン・カーターの引用も、年代から言ってこのシェルドンの一節を踏まえたものと思われます。

ウェールズ皇太子の紋章に記されたドイツ語“*Ich Dien*”は、「私は国家に奉仕する」というような意味だったのでしょうから、ロータリーの *Service* とは関係がありません。カーターの引用は、職業人たるロータリアンは、「奉仕の理

念」を自らの職業に適用しなければならないことを言うために、そしてシェル
ドンは、ロータリーの哲学である Service 哲学を縷々説明するために“*Ich Dien*”
=“*I serve*”という言葉を採用しているのです。両者ともロータリーの奉仕が団体
奉仕ではなく個人奉仕だと言いたくて引用しているわけではありません。

「アイ・サーブ vs. ウィ・サーブ」は、日本固有の議論？

『ロータリー文庫』の資料には、アイ・サーブか、ウィ・サーブかという日
本ロータリアンの議論がいくつか保存されていますが、この議論は戦後日本ロ
ータリーに固有の議論のように思えます。RI が、3-H プログラムやポリオ・
プラスや世界社会奉仕など、人道的支援活動に注力するようになった時期、RI
の方向性に疑問を持ったり異を唱えたりするため、ことさら「ロータリーは職
業奉仕が基本だ」とか、ライオンズの「ウィ・サーブ」というモットーを踏ま
えて「アイ・サーブ（個人奉仕）がロータリーの奉仕の本質だ」とかと強調し
たのでしょうか。

個人奉仕か団体奉仕かという大論争が 1923 年当時のロータリー世界にあっ
たのは事実でしょうが、決議 23-34 によって、論争は決着がつけました。

日本では、同年 1923 年関東大震災が発生し、そのとき世界のロータリアンか
ら送られた多額の寄付によって、東京ロータリークラブは被災者支援活動（孤
児院の設立）を開始しました。日本のロータリアンが世界的ネットワークのロ
ータリーの力を知り、「団体」としての人道的奉仕活動に目覚めた瞬間でした。

ロータリーが「団体奉仕」を否定していれば、その後の、ポリオ・プラスや
米山記念奨学会もなかったことになります。

アイ・サーブかウィ・サーブかという議論は不毛です。「ロータリーはアイ・
サーブだから・・・」という言い方に固執する人は、ロータリーのこれまで 100 年
以上にわたる奉仕実践の歴史を否定することになります。

それに、私たちが大切にしてきた「奉仕の理念」をライオンズの枠組み（ウ
ィ・サーブ）に対比させて語る必要もないでしょう。ロータリー理念の本質が
「アイ・サーブ」にあるわけではありません。

そんな議論をロータリーがしている間に、ロータリーに対するとんでもない
誤解が広まってしまうのです。ネット上のフリー百科事典『ウィキペディア』
の「ライオンズクラブ」の項には次のような説明が載っています。「社会奉仕
活動をロータリークラブ（国際ロータリー）のように職域や個人で行うだけで
なく、チームワークを発揮して行うことによって、有意義な効果をあげるよう
にと、ロータリークラブから分裂する形で組織された団体である。」

ロータリーに対する誤解を前提とした解説だと思いますが、こういう認識を
広めた責任の一端は、これまでの日本ロータリアンの不毛な「アイ・サーブ vs
ウィ・サーブ論争」にあったといえるのではないのでしょうか。

二元論ではロータリーの本質は捉えられない

日本のロータリーでは、これまで、「アイ・サーブかウイ・サーブか」、「個人奉仕か団体奉仕か」、「サービスが先か利益が先か」、「(奉仕の)理想か現実(の生活)か」、「奉仕か親睦か」、「職業奉仕か社会奉仕か」、「会員増強は質か量か」など、両者は相いれない、あるいは並び立たないものだというような議論が盛ん?でした。このような二律背反的な二元論の思考では、豊饒で奥深い「奉仕の理念」やロータリー運動の本質・価値は捉えられないと考えています。

第2章で「奉仕の理念(理想)」を表すロータリーの二つのモットー(標語)について解説しました。

初期ロータリアンは、二つのモットー“Service Above Self”と“He Profits Most Who Serves Best”を「奉仕の理念」の意味を示す同意義の言葉として理解し、二つのモットーを一体のもの(セット)として見ていました。

前掲のアーサー・シェルドンのスピーチ『ロータリーの哲学』1921)では、この二つの言葉を一つのモットー(a motto)として“Service Above Self—He Profits Most Who Serves Best”と一体化した形で示しており、ロータリーの奉仕概念の真髄を、この「一つのモットー」の中の“Service” “Self” “Profit”という3つの概念の本質とそれらの関係を説明することによって浮き彫りにしようとしています。

“Service above Self”を、日本のロータリーの創始者米山梅吉さんは、「サービス第一、自己第二」と訳しました。もう一つの“He profits…”は「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」と訳されていますが、これは「ベストなサービスをすれば、結果として最大の利益を得る。」ということです。

小倉昌男さんの言葉「サービスが先、利益は後」

このロータリーの二つのモットーを想起させる、私が尊敬する日本の経営者の言葉があります。クロネコヤマトの宅急便を開発したヤマト運輸の元社長 小倉昌男さんはロータリアン(銀座新ロータリークラブ)でしたが、宅急便を始めるにあたって「サービスが先、利益は後」というスローガンを掲げました。

小倉さんはこのスローガンをクロネコヤマトのセールス・ドライバーに言い続けました。利益は考えなくてよい。利益は約束した日時に間違いなく届けるサービスの結果である。クロネコヤマトのサービスの価値が認められ利用する人が増えれば利益は出てくる。だから「サービスが先、利益は後」というわけです。

小倉さんの「サービスが先、利益は後」という言葉は、単なるお題目ではなく、実践的な経営哲学でした。そして、この言葉は、二つのロータリーモットーを凝縮した、ロータリアンであった小倉さんならではの言葉のように私には

感じられます。

「統合」の思想としての「奉仕の理念」

「トレードオフ」(trade off)という言葉があります。辞書には「同時には成立しない二律背反の関係。物価安定と完全雇用との関係など。」(岩波書店『広辞苑』)とあります。

「サービス」と「利益」との間にもこのトレードオフの関係があると言われます。サービスを向上させるには経費が必要で、その分利益が減る。その反対に、利益を追い求めれば、サービス向上は難しい、というのです。

果たしてそうでしょうか。小倉さんは「サービスが先、利益は後」という明快なスローガンで、「サービス」と「利益」の因果関係と優先順位を社員に端的に示したのです。

二元論的な思考では、ロータリー運動の本質や「奉仕の理念」の神髄は理解できません。弁証法的思考(正一反一合)、「統合」(Integration)の思想が、ロータリー理解には欠かせません。そして、ロータリーの不毛な二元論を統合・克服できる言葉が「奉仕の理念」“The Ideal of Service”に他なりません。

第8章 ロータリーはなぜリーダーシップという言葉 を多用するのか？

— リーダーシップ と インテグリティ —

ロータリーにおけるリーダーシップとは？

ロータリーでは、リーダーシップという言葉をよく使います。思い出すままに使用例を並べて見ますと、

☆地区リーダーシップ・プラン District Leadership Plan : DLP

☆クラブ・リーダーシップ・プラン Club Leadership Plan : CLP

☆地区指導者育成セミナー District Leadership Seminar

☆ロータリー青少年指導者養成プログラム Rotary Youth Leadership Awards : RYLA

☆ロータリーアウト指導者育成研修 Rotaract Leadership Training

☆クラブ指導力育成セミナー Club Leadership Development Training

☆ロータリー・リーダーシップ研究会 Rotary Leadership Institute : RLI

なぜ、ロータリーでは、リーダーシップという言葉を用いるのでしょうか。ロータリークラブは、総じて事業・専門職務や地域社会のリーダーで構成されています。なぜ「総じて」というと、「事業・専門職務や地域社会のリーダー」の他に、ロータリー財団学友や、2013年規定審議会で採択された「子どもの世話または配偶者の仕事の手伝いのために仕事を中断した人、または同じ理由のために仕事をすることがない人」も会員の構成メンバーとして認められているからです。（『国際ロータリー定款』第5条 第2節「クラブの構成」）

いずれにしても、リーダーの集まりであるロータリーでは、会員がリーダーシップを発揮すべき機会・場面が多くあります。リーダーシップの良し悪しがクラブ組織の強化・成長に直結しています。

ただ、企業体でも公共機関でもないロータリーという組織では、リーダーシップの発揮の仕方は、企業や公共機関における発揮の仕方とは、いささか異なります。ロータリークラブは、企業のように権限を持った固定したリーダー（トップ）が指示・命令して動かす組織ではありません。

クラブの組織運営は、会員の平等・対等な関係が前提になります。組織力を高めるためには、会員全員の合意形成・対話・協力が重要です。毎年交代するクラブ指導者（会長・理事会等）は、会員のモチベーションを高めることと、指導力の継続性（前年度・次年度の指導者との連携）に意を用いることが大切です。

ロータリーでは、リーダーは、固定した役割ではなく、リーダーシップを発

揮する人は場面によって変わります。会員それぞれがクラブ内でその個性と能力を存分に発揮できるよう、クラブ運営にも工夫が必要です。クラブ会員全員にリーダーシップ開発の機会を提供するのは、「クラブ研修リーダー」の役割です。

ロータリークラブはリーダーシップの修練の場ともいえます。「例会は人生の道場である」と喝破したのは、日本ロータリーの創始者米山梅吉翁です。ロータリーでは、会員全員が、必要に応じてリーダーシップを発揮するよう、期待されています！

ところで、ロータリーではこれまで“Leadership”を「指導者」と訳すことが多かったのですが、最近では「リーダーシップ」とカタカナ語のままにするようになってきました。英和辞典で“Leadership”を引くと、「1 指導者の地位、指導（力）、指揮、統率、リーダーシップ 2（集合的に）指導者たち、指導部」（大修館書店『ジーニアス英和大辞典』）とあります。

上述のように、ロータリーの“Leadership”とは、ロータリアン全員に求められる資質であることを考えれば、「指導力」または「リーダーシップ」とするほうが適訳の場合が多いようです。

中核的価値観 “Core Values”

「リーダーシップ」という言葉は、RIの「戦略計画」“Strategic Plan”に出てきます。「戦略計画」では、ロータリーの「使命」“Mission”を謳い、3つの戦略的優先課題を掲げるとともに、「中核的価値観」“Core Values”として次の5つのキーワードが示されています。

「奉仕」“Service”、「親睦」“Fellowship”、「多様性」“Diversity”、「高潔性」“Integrity”、「リーダーシップ」“Leadership”の5つです。

奉仕と親睦

このうち、最初の二つ、「奉仕」“Service”と「親睦」“Fellowship”は、昔からロータリーの両輪と言われています。

ロータリーの目的は、「奉仕の理念」を奨励・育成することですから、「奉仕」“Service”がロータリー理念の中心概念であることはいまでもありません。現代ロータリーでは、「奉仕」“Service”を最も広い意味で使っています。すなわち、「社会に役立つ価値を提供すること」「世のため人のために尽くすこと」です。

「親睦」の原語“Fellowship”の原義は、「仲間であること、仲間意識、仲間同士の親交、友情」ということです。単に一緒に酒を飲んだり、ゴルフをしたりする、ということではなく、「奉仕の理念」を共有する仲間との例会での奉仕の心の研鑽や地域社会での奉仕活動の実践、そして世界中のロータリアンとの

親交を通じて育まれるのが“Fellowship”です。「ロータリーの目的」(RI定款・標準ロータリークラブ定款 第4条)の第4項に「奉仕の理念で結ばれた職業人が、世界的ネットワークを通じて、国際理解、親善、平和を推進すること」とありますが、この「世界的ネットワーク」は“world fellowship”の訳なのです。

多様性

「多様性」“Diversity”が保たれていることが、組織活力の源泉です。ロータリーの「職業分類制度」は、ロータリーの多様性を端的に示しています。年齢や性別も問いません。また、ロータリーは、人種や国境を超えて 200 以上の国と地域に広がり 120 万人以上の会員を擁する世界的なネットワークになっており、世界各地のロータリークラブで実践されている奉仕プロジェクトも多様性に富んでいます。ロータリーは、多様性そのものだといえます。

高潔性 Integrity について

さて、「高潔性」“Integrity”という言葉は「戦略計画」で初めて示され、私たちには耳新しいので少し解説が必要です。

“Integrity”という言葉は、日本語に訳し難い言葉のようです。「戦略計画」では「高潔性」と訳されていますが、ロータリー以外の文献でも日本語の適訳を見つけるのに苦労しています。

『「誠実さ」(インテグリティ)を貫く経営』(高 巖 日経新聞社 2006 年)という本では、「インテグリティの本来的な意味は、言うことと行なうことが一貫し、そこにぶれが無いこと」と解説されています。『オックスフォード現代英英辞典』では、“the quality of being honest and having strong moral principles” (誠実であるとともに強固な倫理原則を維持できている状態) という語義が示されています。

ピーター・ドラッカーの『マネジメント』(1974 年)には、「マネージャーの資質」として、「学ぶことのできない資質、後天的に獲得することのできない資質、始めから身につけていなければならない資質が一つだけある。才能ではない。真摯さである。」という有名な一節がありますが、この「真摯さ」が“Integrity”の訳語なのです。

また、同じ『マネジメント』の中で、「リーダーシップが発揮されるのは真摯さによってである。範となるのも真摯さによってである。…範とすることのできない者を高い地位につけてはならない。」とも言っています。

『リーダーの人間力』(日本能率協会マネジメントセンター刊 2010 年)という本があります。精神科医ヘンリー・クラウドの著作で、サブタイトルが「人徳を備えるための 6 つの資質」となっています。この本の原題 (オリジナルタイトル) がずばり、“INTEGRITY”です。翻訳者は、この本で主張されている「インテ

グリティ」という言葉の持つ意味が「高潔さ」という訳語に収まりきれないと考え、原題をタイトルにするのを断念しています。

この本の中で、「インテグリティ」は、「一人の人の全体が統合されており、個々の部分がうまく活動し、目指す機能を果たすこと。＝人間として全体性があり、効果を上げていること」と要約されており、「インテグリティ」をリーダーが備えるべき資質として細かく分析していきます。

このように、「インテグリティ」と「リーダーシップ」とは、切っても切れない関係であることがわかります。インテグリティが備わっていなければ、リーダーシップは十分には発揮できないのです。

インテグリティはリーダーシップの核心

スタンフォード大学ビジネススクールのロバート・ジョス名誉教授は、その「リーダーシップ概論」の講義の中で、インテグリティとリーダーシップの関係について端的に表現しています。(『世界最高峰ビジネススクールの「人生を変える言葉』佐藤智恵・早川書房編集部編：早川書房刊 2013年)

「インテグリティはリーダーシップの核心である」“Integrity is the heart of leadership.”。(訳者は「リーダーは常に清廉であれ」と意識している)

「インテグリティ」は、一貫した『誠実さ』『真摯さ』『高潔さ』など、**リーダーが具えるべき『人徳』・『人間力』**と言ってよいと考えます。ドラッカーは「学ぶことができない生得の資質」と断言していますが、私たちロータリアンは、自己研鑽によって、「インテグリティ」を高める努力をすべきでしょう。『人徳』・『人間力』なら磨き、高めることができます。

戦略計画における5つの「中核的価値観」のうち、「奉仕」“Service”と「親睦」“Fellowship”、「高潔性」“Integrity”と「リーダーシップ」“Leadership”は、それぞれ2語をセットにして考えればより理解が深まるでしょう。

5つの「中核的価値観」は、2009年11月のRI理事会で承認された「戦略計画」で初めて提示されたものですが、過去100年以上にわたるロータリーの「奉仕の理念」実践の中で育まれてきた価値観を凝縮したものと考えられます。私たちロータリアンの行動原理・行動規範として、共有すべき大切な価値観です。

第9章 ロータリーは 時代遅れか？ — ロータリーの理念と組織をめぐって —

ロータリーは古臭い？

ロータリーは時代遅れだと言う人がいます。古き良き時代に隆盛を極めた組織形態で、激変する現代社会の中では、多くの類似する古い市民組織や地域コミュニティと同様、衰退傾向を示している（例えばロバート・パットナムの『ソーシャル・キャピタル論』柏書房『孤独なボウリング』2006年）とか、100年前の米国社会で生まれた古臭い理念や理論を後生大事に守っても、グローバル化した現代社会の複雑な課題に通用するはずがない、というのです。

ロータリーは時代遅れかどうか。ロータリーの理念と組織の両面で考えてみましょう。

ロータリーの理念

ロータリーは20世紀初頭、自由主義経済が沸騰し小恐慌が繰り返される、景気変動の激しい時代に米国のシカゴで誕生しました。当然そうした時代背景や米国の文化的・宗教的・思想的背景を踏まえて理解する必要があります。

米国で生まれたロータリーの思想的基盤がキリスト教にあるのは言うまでもありません。初期のロータリアンは、ロータリーの「奉仕の理念（理想）」が、聖書の「マタイによる福音書7章12節」にある「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」（黄金律）という言葉と同じ意味だと考えていました。

一般的なキリスト教の背景に加えて、マックス・ウェーバーが指摘するプロテスタンティズムの倫理観が、ロータリーの思想的基盤にはあると考えられます。ウェーバーは、その著書で「非常に強い潔癖な倫理観がなければ、資本主義は成立しない」と言っています。

自由主義経済が過熱し、激しい好不況の波に人々が翻弄されていた1905年のシカゴで、その波から身を守り対抗しようとした一群の人々がロータリーを立ち上げたのです。

もう一つの背景は、厳密な意味で言うものではありませんが、19世紀から20世紀にかけての「科学主義」の流れがあります。ロータリーのService理念を確立したアーサー・シェルドンは、その理念を「原因と結果の科学」として解説しています。シェルドンの墓碑銘に記された肩書きは「ビジネス・サイエンティスト」でした。

このように、ロータリーの理念は、20世紀初頭のアメリカという歴史的・地理的・宗教的制約の中に誕生したといえますが、その限界を超えた普遍的・世

界的価値を認める人も多くいます。

ロータリー理念と世界思想の共通性

台湾出身のゲイリー・ホァン 2014-2015 年 RI 会長は、今年 1 月の国際協議会で孔子の言葉を引用しながら、孔子を「世界最初のロータリアン」と呼んでいます。かつて、日本のシニアリーダーのお一人が、二宮尊徳を「ロータリー以前の偉大なロータリアン」と表現したこともありました。

日本では仏教・儒教や、日本の商人道・商道徳とロータリー理念との類似を語ることがよくあります。最澄の「忘己利他」、近江商人の「三方よし」、大丸の家訓「先義後利」、石田梅岩の心学、二宮尊徳の「報徳の教え」、渋澤栄一の『論語と算盤』などなど。

先に示したキリスト教の黄金律に似た金言は世界宗教、世界思想に数多く見られます。このような共通性は、ロータリー理念の普遍性や、「正しい生き方」「善き生き方」に対する世界共通の考え方を示しているのではないかと思います。

ロータリー理念と現代経営論

コンプライアンスや企業の社会的責任（CSR）など、現代経営論の文脈でロータリー理念の有効性を指摘する人もいます。近年 RI の職業奉仕委員会でも、『ISO26000（組織の社会的責任）』の枠組みでロータリーの職業奉仕理念を再構成しようという試みもあったそうです。

私も、セルフアセッサーの資格を持って学習と実践を続けている、『経営品質向上プログラム』（日本経営品質協議会）の枠組みで、ロータリー理念の現代性・有効性を検証してみたことがあります。詳細は省きますが、「経営品質」の「基本理念」や「重視する考え方」は、ロータリーの「奉仕の理念」や“Fellowship”の重視や「入りて学び、出でて奉仕せよ」という運動論などと共通の価値観が表明されています。

100 年前、ロータリークラブのような社交クラブはシカゴの街に無数にあったそうです。その中でなぜロータリーだけが生き残り、発展してきたか。ロータリー理念に普遍的な力があつたからではないでしょうか。

アーサー・シェルドンが主導した、ビジネスの正しい方法としての Service（奉仕）の概念から始まった「奉仕の理念」は、シェルドンの時代には考えられなかったような広がりや深さを 100 年の実践の歴史の中で獲得したといえます。

私が素晴らしいと思うのは、ロータリーの「奉仕の理念」が、その歴史的・地理的制約を超えて、100 年後の我々のビジネスや生き方にも学ぶことの多い、そして現代の世界的課題を解決する大きな力、普遍性を持った理念・思想であるということです。

組織としてのロータリー

次に、組織としてのロータリーを考えます。今では 200 以上の国と地域に 120 万人の会員を擁する世界的ネットワークに発展したロータリーと、私たちの所属するロータリークラブの組織としての現状はどうでしょうか。

「ロータリーはステイタスがなくなった」とか「ロータリーは劣化した」と嘆く声があります。一業種一人の原則がなくなったとか、例会出席率をうるさく言わなくなったとか、増強、増強と誰でも入会させるのかとか、中には、女性にも会員資格が認められたとかの、数々の“規制緩和？”や“緩み”を問題にするベテランロータリアンたちがいます。

本当に「昔はよかった！」のでしょうか？「ステイタス」だけで何もしないロータリーを、世間は「暇なお金持ちの昼食会」と揶揄したのではなかったのでしょうか。

何も知らない若い会員が増えたと嘆くベテランは、それが自分たちのリーダーシップの欠如が原因だと考えないのでしょうか。ロータリーが劣化していると言うのは、それは自分たちが劣化していると言うのと同じです。

ただ、ロータリーの組織は、時代に対応できていないのではないかと、時代遅れになってはいないかと、問うてみることは必要です。

クラブ組織の硬直化

どんな組織も発足当初は活力に満ちあふれていますが、時が経過し、組織が拡大し機構が複雑化するとともに、その機能が硬直化し活力を失っていきます。

「組織の硬直化」とは、組織がその目的を見失ったり、目標を達成する意欲をなくしたり、成功体験におぼれて前例主義・画一化・リスク回避や変革を厭う体質になったり、組織構成員間のコミュニケーションが不足し派閥ができたなどして、時代や社会に対応すべき機能が不全に陥った状態をいいます。

硬直化が進むと、その組織が掲げる理念や目標を達成することも成果を上げることが難しくなります。日本のロータリークラブの多くは、この「組織の硬直化」に直面しているのではないのでしょうか。

昨年 10 月の地区大会で採択された 2840 地区 3 か年戦略計画の主テーマは「**クラブを元気にしよう**」です。地区として指標（目標）を設定し、活力と活気に満ちたクラブづくりにクラブとともに果敢に挑戦することを謳っています。

クラブ組織の硬直化を防ぎ、そこから脱するためには、ロータリー理念を深く理解し、クラブのビジョンやアイデンティティを繰り返し確認しながら、魅力的なクラブづくりに会員全員で取り組む必要があります。クラブ組織の活性化は私たちの永遠の課題です。

運動体としてのロータリーの可能性

先日、静岡県三島の近くにある米山梅吉記念館を見学する機会がありました。記念館を訪ねるのは 3 回目ですが、これを機に米山さんの残された文章を再読してみました。米山さんのロータリー理解は、まことにシンプル、ストレートで深いものがあります。現代のロータリーは、組織が複雑化し、活動が多様化する中で、米山さんがしっかり捉えていたようなロータリーの本質的な価値が見えなくなっているような気がします。

その組織の中核的な理念・思想が組織のあり方や方向性を決めます。理念と組織運営の間にちぐはぐさや脈絡のなさが見られるとすれば、その組織に明るい未来はないでしょう。理念と組織が一貫した運動体としてのロータリーを再構築すべき時なのかも知れません。

ロータリーを、衰退しつつあるオールド・ファッションの市民組織ではなく、魅力的で可能性に満ちた理念と運動論をもった組織に再構築するという事です。私たちは、ロータリーが持っている可能性をまだ十分には開発できていません。ロータリーの大きいなる可能性を信じるところから始めましょう。

第10章 奉仕は他者のため？ 自分のため？

— 究極の利他主義としての「奉仕の理念」 —

「奉仕の理念」は理想論？

私たちロータリアンは、なぜロータリークラブにいそいそと集うのでしょうか。多忙な職業人である私たちは、なぜ自分の時間を割いてまで、熱心に奉仕の実践に取り組むのでしょうか。経済合理性を追求すべき組織のリーダーである私たちは、なぜ自己の利益より他者への奉仕を優先する「奉仕の理念」という「理想」を信奉し実践するのでしょうか。

昔から一般の人々のロータリーやロータリアンに対するイメージは変わっていないようです。1919年、ロータリーの創始者ポール・ハリスに取材した新聞記者が記事でこう書いています。「彼（ポール・ハリス）が組織したのは奇妙な団体で、会員はその団体から何も得ないどころか、善を行うという特権を手にするために会費を払うのである」（“*Huston Chronicle*” 1919年）

社会に何か良いことをしようとしている奇特な人々のようだが、よく理解できない団体だ、という認識です。こうしたロータリーに対する世間の見方は、残念ながら現代に至ってもそれほど変わっていません。

それどころか、ロータリアンの中にも、「奉仕の理念」は素晴らしい理念だが非現実的な「理想」にすぎないとか、「四つのテスト」どおりにやっていたら仕事にならない（実際の仕事にそのままでは適用できない厳格すぎる規則だ）、などと主張する人がいます。果たしてロータリーの「奉仕の理念」や「四つのテスト」はお題目だけの理想論にすぎないのでしょうか？

「利己」と「利他」はトレードオフか？

本稿の第7章で、ロータリー理念やロータリー運動の本質・価値は、二元論的な思考では捉えられない、と申しました。また、振り返ってみますと、第2章で「奉仕の理念」を論じたときには、『奉仕の理念』は、決して利益を求めて奉仕するという功利主義的な思想ではなく、他者のために尽くすことが自らの幸せ（喜び）であるという、他者に奉仕すること自体を目的とする利他主義の思想です。究極の『奉仕の理念』とは、利己と利他の矛盾などない、利己と利他が完全に一致する状態だといえるでしょう。」と早くも口走っています。思えばこのことを私なりに「論証」し、皆様にも得心していただくために、これまで紙数を費やしてきたような気がします。

「トレードオフ」（trade off）という言葉が第7章でご紹介しました。一般に「同時には成立しない二律背反の関係」（岩波書店『広辞苑』）という意味ですが、「サービス（奉仕）」と「利益」や「利己」と「利他」とがトレードオフの関

係にあるという考えにとどまっている限り、ロータリーの「奉仕の理念」は理解できません。

「利己」と「利他」をめぐって

利己と利他をめぐる議論は古今東西尽きません。日本では、最澄さんの言葉と言われている「忘己利他」や「自利とは利他をいう」など、仏教の教えの中に、人間の利他的行動に関する深い洞察を見ることができます。近年、「実験社会心理学」「人間行動進化学」「進化倫理学」など学問の分野でも、なぜ人は時に自分を犠牲にしてまで利他的行動をとるのか、という問いに応えようとする試みがあります。

進化倫理学の立場から、利他的行動は、結局人間が本来持っている「利己性」に起因すると主張する学者もいます。「個々の生物は、自分が生存・繁殖する上で利益になる性質を進化させており、『利己性』は、生物一般の基本的性質である。」「他者への利他行動は、将来、周囲の不特定の人たちから『見返り』を得るための『投資』」であり、「道徳や正義は、利益に向けて生き、利益のために社会生活をする人間という生物にとって、その利益を得るために必然的に尊重すべき『生の指針』なのである。」というのです。（『進化倫理学入門―「利己的」なのが結局、正しい』内藤淳 光文社新書 2014年） 「情けは人のためならず」というわけです。

一方、最近の脳研究で「私たちには、他者に対して親切にふるまうという、そのこと自体を報酬（快）と感じる仕組みがある」という報告もあるそうです。（『利他学』小田亮 新潮社 2011年）

アメリカの心理学者アブラハム・H. マスロー（1908―1970）が1950年代に提唱した「欲求5段階説」（本人は有名な5段階のピラミッド図は示していない。5段階説は実証性に欠けるという批判がある）の最高段階が「自己実現」です。個人主義的な概念と誤解されやすい「自己実現」について、マスローはこう言っています。

「自己実現の水準では、多くの二分法は解決され、対立概念は結合される」。「自己実現する人は、利己主義と無私の態度とが、一層高次の上位単一体のうちに融合する傾向が強い」。「自己実現をする人は、愛他的、献身的で、自己超越的、社会的である」。「人間の成熟の高い水準にあつては、多くの二分法、両極性、葛藤は融合し、超越し、解決される。自己実現する人間は、利己的であると同時に、利己的でない」。（『完全なる人間』上田吉一訳 誠信書房 1998年）

マスローは、自分の枠を越えた目的、対象に向かうこと、己と他人の「二項対立」がないことが、究極の到達すべき人間のあり方であると言っているのです。

究極の利他主義としての「奉仕の理念」

さて、ロータリーの「奉仕の理念」の意義は、“Service Above Self”と“He Profits Most Who Serves Best”という二つのモットーを一体化して捉えることによって了解されると申しました（第2章）。アーサー・F・シェルドンの『ロータリーの哲学』（1921）でも、「決議23-34」（1923）でも、この二つのモットーが一体の形で、ロータリー哲学である「奉仕の理念」が示されています。

2010年規定審議会では、『社会奉仕に関する1923年の声明』（決議23-34）の第一項を、奉仕の哲学の定義として使用することを検討するようRI理事会に要請する件」（決議案10-182 釧路北RC提案）が444対66の圧倒的多数で採択されました。第1項には次のようにあります。

「ロータリーは、基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情とのあいだに常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は奉仕—“超我の奉仕”の哲学であり、これは“最もよく奉仕する者、最も多く報いられる”という実践的な倫理原則に基づいている。」

この時代（1920年代）のロータリアンの認識では、まだ利己と利他は対立・矛盾・葛藤の関係にあったのかも知れません。利己と利他の矛盾を和らげ、バランスをとる人生哲学が「奉仕の理念」であったのかも知れません。

シェルドンが“Service”と“Profit”の関係を、「原因と結果の科学」として、ことさらに「科学」を強調したのは、“Service”と“Profit”とが、トレードオフの関係にあると思われていた時代の風潮に対する「防衛反応」だったのかも知れません。シェルドンの墓碑銘には「ビジネス・サイエンティスト」という肩書が刻まれています。

科学は、現代においても人間の利他行動の理由を合理的・科学的に説明したり、解釈したりすることはできますが、それで「利他」をすっかり認識できたとは言えません。

認識するとは、自らの内にその本質的意味を体感し得心するということです。マスローの「自己実現的人間は自己超越に達する」と言う主張も、心理学者としての実証的・科学的見解というより、曰く言い難い哲学的直観に基づくものだと思います。

ロータリーの「奉仕の理念」が、利己と利他の矛盾・葛藤を和らげる人生哲学から、利己と利他が完全に融合された究極の利他主義にまで達することができたのはなぜでしょうか。

ロータリーを生きる

ロータリーは決して宗教ではありませんが、参加すること、行動すること、実践することで、ある種の「啓示」や「悟り」の瞬間が訪れることがあります。

田中作次 RI 直前会長が提示した「ロータリーモメント」（ロータリーの感動体験）もそういう瞬間を表現したものと言えるでしょう。

ロータリー100年の歴史の中で、奉仕する喜びを体感した数多のロータリアンがいます。彼らの味わった奉仕することで得られた充実感、自己成長感、自己実現感が、「奉仕の理念」の意味を磨き深めていったのです。

数多のロータリアンによる奉仕の実践の積み重ねによって、「奉仕の理念」という人生哲学は、他者のために尽くすことが即、自らの幸せ（喜び）になるという究極の利他主義にまで成長していったといえるのではないのでしょうか。

ロータリーに積極的に参加し、熱心実践するロータリアンにとって、義務と遊び、利己心と利他心、野心と無私無欲とは融合して一つのものになります。奉仕は他者のためでもあり、自分のためでもあるのは自明なことなのです。

第11章 会社は営利を目的としているのか？

— 試金石としての「奉仕の理念」 —

前章で、ロータリーの「奉仕の理念」が究極の利他主義であると書き終えたことで、「奉仕の理念」については語り尽したような気がしました。しかし、この連載コラムの数少ない？熱心な読者の何人かに「今回は少し難しかった」と感想をいただきました。また、私たちロータリアンが自己の利益より他者への奉仕を優先する「奉仕の理念」という「理想」を信奉する理由や前提となる信念について述べるのを忘れていたことに気付きました。そこで今回は、前章「究極の利他主義としての『奉仕の理念』」の補足説明をしたいと思います。

3種類の経営者

まずは、事業や専門職務のリーダーである私たちロータリアンが拠って立つ経営理念に対する考え方の問題です。私がこれまで出会った経営者の中には、ロータリアンであれ、そうでない人であれ、経営理念と現実の経営について3種類の違う考え方をする人たちがいました。

一人目は、経営理念についてはあまり興味がなく、利潤の最大化が経営者の仕事と標榜し、実際、利益の追求を最優先させる人です。

二人目は、社是や社訓には「お客様第一主義」を謳っており、内外に表明しているのですが、それは、社長室や会議室の壁に飾られているだけで、実際は顧客満足より売り上げや利益目標の達成を社員に強く求める人です。

三人目は、顧客本位・社員重視の理念を掲げ、現場レベルまで理念の浸透と実践に努め、自身も経営理念と行動実践がぶれなく一貫している人です。

この三人目の経営者がロータリーの「奉仕の理念」を理解し得心するのは容易なのですが、残念ながらこういう経営者は少数派なのです。

会社の目的は利益の追求か？

会社の目的は、本当に利益の追求なのでしょうか。辞書には、「会社：営利事業を共同の目的として作った社団法人」（三省堂『新明解国語辞典』）とあります。高校の「政治経済」の授業でも、企業は利潤の最大化を図るもの、と教わるそうです。辞書は、法律上の「会社」の定義を援用したもの、政経の授業は、企業活動の経済学的な解説だと思います。いずれも、会社や企業の経済的側面を示すものですが、もちろん、企業活動の全体や本質はそれだけで示されるわけではありません。社会の中における会社の役割を考えれば、利益は会社の目的にはなり得ません。

利益は二の次だということではないのです。利益は、企業活動を続けてゆく

ために欠かせないものです。お客様によりよい商品やサービスを提供し続けるため、法人税を払い最低限の社会的義務を果たすため、社員の給料を確保するため、会社を存続してゆくため、利益は必要です。ですから、経営者は利益を出すために不断に努力します。しかし、それでも利益は、会社の目的ではありません。利益は、その会社の商品やサービスの価値をお客様が認め利用していただいた結果であり、会社が存続し、よりよい商品やサービスを提供し続ける条件となります。そういう意味で利益は会社にとって重要なのです。

本当の会社の目的とは

利益が目的ではないとすれば、会社の目的とは何でしょうか。ピーター・ドラッカー（1909－2005）は、「企業は社会の機関であり、目的は社会にある。したがって、事業の目的として有効な定義はただ一つ、顧客の創造である。」（『現代の経営』1954年）と言っています。その会社のお客様はどうすれば「創造」できるのでしょうか。お客様に喜ばれる、お客様を幸せにする商品やサービスを提供することによって、お客様の信頼を得ることによってしか、お客様は創造できないし、会社は社会やお客様から存在価値を認められません。

ドラッカーは、別のところでこうも言っています。「組織は、…それぞれが社会的な課題を担う、社会のための機関である。…組織の目的は、社会に対する貢献である。」（『断絶の時代』1969年）また、「組織が存在するのは、…自らの機能を果たすことによって、社会、コミュニティ、個人のニーズを満たすためである。」「現代の組織は、それぞれの分野において社会に貢献するために存在する。」（『マネジメント』1974年）つまり、企業であれ公的機関であれ、社会的機関、社会的組織の目的は、「社会貢献」である、と言っているのです。

会社は、その経済的側面から評価するだけでは不十分で、社会に対して果たす役割、社会的価値で評価されるべきだと考えます。先に述べた一人目の経営者、理念なく利益を最優先する経営者は、利益を確保するために、安易に値上げをしたり、コストをカットして商品やサービスの品質を落としたり、人員整理をしたりしがちになります。不祥事を起こす会社は、こういう経営者が率いる会社ではないでしょうか。利益が出ないと嘆く経営者がまず取り組まなければならないのは、「顧客の創造」すなわち、自分たちが提供する商品やサービスがお客様に受け入れられ認められるためには何をどう変えればよいのかを考えることです。

会社の目的は、「社会貢献」すなわち、社会に役立つ価値を提供すること、世の中の役に立つこと、であるということが得心できれば、ロータリーの「奉仕の理念」を、私たちロータリアンが信奉する理由も容易に了解できるでしょう。ロータリーの言う「奉仕」“Service”とは、「社会に役立つ価値を提供すること」「世のため人のために尽くすこと」に他なりません。

不変の理念も実践によって深化する

もう一つ、補足説明をしなくてはなりません。

前章で、「数多のロータリアンによる奉仕の実践の積み重ねによって、『奉仕の理念』という人生哲学は、他者のために尽くすことが即、自らの幸せ（喜び）になるという究極の利他主義にまで成長していった」と申し上げました。

確固たる理念がその組織の方向性を定め、発展してゆく原動力となります。理念はころころと変わるようなものではありません。しかし、不変の理念も実践によって深化する、私たちの実践が理念をより生き生きと輝くものにする、ということの前章では言いたかったのです。

「不易流行」という言葉を使って、ロータリーの理念は不変だが、方法や奉仕実践の分野、組織運営のあり方は時代の要請に適うべく変化させてゆくものだ、とシニアリーダーが解説することがあります。私もこの意見に概ね賛成ですが、ロータリーの「奉仕の理念」は、それが生まれた初期ロータリーの時代のみではなく、100年の奉仕の実践を通して、喜びを体感したロータリアンの心の中で磨かれ深化していった。そして現在の私たちロータリアンの実践の中で一層深く、輝きを増し続けていることは忘れないようにしたいと思います。

もちろん、ロータリーの「奉仕の理念」の核心に最初から「利他の心」があったのは間違いありません。ロータリーの創始者ポール・ハリスは、当時の機関誌「ナショナル・ロータリアン」の1912年7月号に「人生訓」“*Life's Lesson*”という文章を寄稿しています。その中で、ポールは、「生きる目的は何か」と自問し「学ぶこと」だと答えています。そして、「何を学ぶために生きているのか」と問い「自己にとらわれないようになること」「自我との決別」を学ぶ、と自答しています。（ポール・ハリス語録『過ぎし時に敬意を表して』）利己から利他へ至る道は、当時も困難な道だったのでしょう。

試金石としての「奉仕の理念」

先日の地区研修・協議会（2014年4月19日 太田ティアラグリーンパレス）では、国際ロータリー田中作次直前会長に『ロータリーの魅力』という演題で特別基調講演をお願いしました。その中で、田中直前会長は、「ロータリーの奉仕とは人のために役立つこと」であり、ロータリーでは「人を幸せにするために奉仕する喜び」を味わうことができる。「人のために役立つことが自分の喜びと感じるのがロータリーの魅力だ」と明快におっしゃいました。

ロータリーの「奉仕の理念」を得心できるかどうかは、私たちの職業観、経営観、倫理観、人生観が利他の心に基づいているかどうかの試金石と言えます。

ロータリーに積極的に参加し関わろうとしない人には「奉仕の理念」の神髄を体得することは難しいのかもしれませんが、ロン・バートン会長のテーマ“Engage Rotary, Change Lives”をもう一度噛みしめてみましょう。

第12章 ロータリーに希望はあるのか？

— ロータリーの希望を語ろう！ —

RI テーマの日本語訳をめぐる

ロータリーの言葉についての話題は尽きませんが、残念ながら本章が最終章です。本稿は、米国発祥で英語がすべての文献の正典とされるロータリーにおいて、翻訳された日本語でロータリーを理解している私たち日本のロータリアンが陥りがちな「誤解」について考えてみようというところから始まりました。

2013-14年度ロン D. バートン RI 会長のテーマは、まさに英語原文と日本語訳のずれを考えるのに格好の題材でした。

2013年1月の国際協議会でロン D. バートン会長エレクト（当時）が発表した RI テーマは、“Engage Rotary, Change Lives” でした。世界の 537 地区から集結した私たちガバナーエレクトの仲間は、このテーマをスタンディング・オベーションで熱狂的に歓迎しました。

その時、日本語訳は「ロータリーを実践し みんなに豊かな人生を」と示されましたが、私は、ずいぶん意識しているなあ、と少し違和感を覚えました。

国際協議会の間、そして帰国後も日本の同期ガバナーエレクトの皆さんと RI テーマの日本語訳について意見交換を行いました。素晴らしい名訳だという人もいましたが、ちょっと意識し過ぎではないかという人もいました。ネットで検索した欧米の各国語（ドイツ語、フランス語、スペイン語）訳も比較参照しました。こうした議論そのものが、私たち同期の RI テーマに対する理解を深めたと感じています。

テーマを素直に訳せば、“Engage Rotary” は「ロータリーに積極的に参加しよう（関わろう）」、“Change Lives” は「自分も含めてみんなの人生（生活・生き方）を変えよう」となるだろうと考えました。

その後、ロン・バートン会長本人とそれ以外の人とに関わらず、このテーマを引用した英文の文章の日本語訳で、“Engage Rotary, Change Lives” を「ロータリーを実践し みんなに豊かな人生を」という訳に置き換えるだけでは、日本語として文意が伝わらない場合が多いことに気づきました。

ロン・バートン会長も、毎月の会長メッセージやインタビュー記事（ロータリーの機関誌である『ザ・ロータリアン』と日本の地域雑誌である『ロータリーの友』の共通記事）の中で、“Engage Rotary, Change Lives” というテーマを念頭に置いて、“engage” や “engagement”、“change” という言葉をキーワードとしてよく使っています。

日本語訳は、それぞれの文脈の中で工夫された適訳となっています

（“engagement”は「積極的な参加」など）が、日本語を読んだだけでは、原文が RI テーマを踏まえた表現であるとは気がつかないのです。

最近、地区内のあるクラブの周年式典に参加した台湾の友好クラブ会長と名刺交換したとき、その名刺には、RI テーマが「**參與扶輪 改變人生**」と印刷されていました。「參與」は「参与」＝参加し関与すること。「扶輪」は「ロータリー」。「改變」は「改変」です。

また、ある地区の地区大会に来日した韓国からの RI 会長代理によれば、韓国語訳（ハングルが読めないので今まで知りませんでした）を日本語に訳し直すと「**ロータリーに参加し、人生に変化を**」となるそうです。

先日（4月13日）2700地区の福岡での地区大会に参加したのですが、そのとき RI 会長代理のラタクル元 RI 会長（タイ国）がその挨拶の中で、“Engage Rotary, Change Lives”は「今後長年にわたり実行すべきテーマ」だと強調されていました。「ロータリーに積極的に参加し、人生を変えよう」という意味でとらえれば、ラタクルさんの主張がすんなりと腑に落ちるのです。

本年度の RI テーマは、ロータリーの不変の理念である「奉仕の理念」、「超我の奉仕」とともに、今後も私たちロータリアンの基本的な行動指針であり続けるでしょう。

今となっては、「ロータリーを実践し みんなに豊かな人生を」という公式日本語訳は、ロン・バートン会長のテーマに込めた真意を伝えるにはいささか不適切な訳であったと言わざるをえません。

RI テーマと地区スローガン「希望を語ろう！」

国際協議会では、RI テーマを地区内クラブや会員に徹底するのがガバナーの務めだ、と研修リーダーから指導を受けました。

そのとき、ロン・バートン会長のテーマは私たちへの問題提起（Challenge）であり、私のロータリーライフで得た実感と一致する、大いに共鳴・共感できる普遍的な指針だと感じ、その後、このテーマの意義を機会あるごとに地区内会員に訴えてきました。そのときに“補助線”のように使ったのが「**希望を語ろう！**」という地区スローガンです。

今、ロータリーは危機の時代を迎えているといわれます。2000年7月に2840地区が2560地区（新潟）と地区分割してスタートして以来、歴代地区ガバナー年度の最重要・最優先の課題は、止まらない会員減少をどう捉えいかに対応してゆくか、ということでした。

会員減少が「ロータリーの危機」なのではありません。会員減少は、「危機」の表れです。ロータリーの魅力の低下、クラブ活力の低下、クラブ組織の硬化にこそ「危機」の本質があります。

ロータリー運動そのものが時代遅れだという人もいます。私は社会情勢や外

部環境にロータリー危機の原因を求めても、問題解決はできないと考えています。課題は、ロータリーの内部に、クラブの内部にあります。

今、クラブや地区の活動のあちこちで活力再生の兆候、未来への「希望」の芽は育ちつつあります。クラブの中に「希望なんてどこにあるの？」と思う方は、クラブの現状に「あきらめ」や「不信」を感じているのでしょうか。問題意識を持たずアクションを起こそうとしない方は、「会員はだいぶ減ったが、(残った) 会員は皆仲が良いから」と現状を是とし安住しようとしているのでしょうか。単なる「仲良しクラブ」に陥ったクラブに未来はありません。

「希望」とは私たち（ロータリーそしてロータリークラブ）が持っている可能性を信じることです。現状に安住する気持ちからは希望は生まれません。変化を強く望む心に希望は生まれます。

クラブの将来像をみんなで語り合い、クラブに対する思いをひとつにすることから、希望は始まる、ということ、地区協議会や地区大会でのガバナー・メッセージやクラブ公式訪問などあらゆる機会に訴えてきました。

危機を言い募るだけではなく、希望を語ることから始めること。そして、クラブ指導者の皆様は、クラブの中の希望の芽を育て、次世代へ希望を伝えてゆく責任があることを、再確認したいと思います。

私は、ロン・バートン会長のテーマと地区スローガンを一体化して地区内会員へのメッセージとしています。

「ロータリーに積極的に参加し、自分の生き方を変えれば、自分の中に「希望」を発見するでしょう。そして、その「希望」をクラブの仲間と分かち合い行動を起こせば、みんなの人生をより良いものに変えてゆく可能性、すなわち「希望」を確信するでしょう。」

「希望」を語るクラブの条件

ところで、「希望」を語ることのできるクラブの条件とは具体的に何でしょうか。元気なクラブ、魅力的なクラブ、活力のあるクラブ、会員が楽しく参加できるクラブとは、どういうクラブのことを言うのでしょうか。元気なクラブづくりの障害となる主因は二つです。「前例主義」と「年功序列」が、ロータリークラブの諸悪の根源です。諸悪とは言うまでもなく、クラブの魅力や活力の低下、クラブ組織の硬直化のことです。

諸悪の根源は前例主義と年功序列

まずは「前例主義」。ロータリアンはリーダーの集まりですから、事業の成長・発展のため、日頃職場では改善やイノベーションを強く求めているはずですが、不思議なことにロータリークラブの運営に関しては、クラブ会長になっても、前年のやり方を踏襲するだけで事足りりとしてしまう方が多いのです。いわゆ

るワン・イヤー・ルールに従って大過なく過ごそうとでも考えているのでしょうか。どんな組織も放っておけば、衰退への道を辿ることになります。

次に「年功序列」。企業においては、年功序列の弊害が言われて久しいのですが、会員は皆対等・平等であるべきロータリークラブで、そういう言葉を聞くことがあります。歴史の長いクラブで今でもときどき耳にするのは、「長老支配」という言葉です。何か新しいことを始めたいと思っても、声の大きいベテランロータリアンが反対すれば、何事も当たり障りのない意見に落ち着いてしまうことが多く、若い会員が提案した新規事業の企画はつぶされ、結果としてクラブへの参加意識やロータリーに対する意欲が低い会員が多くなるというのです。

自律的で開かれたクラブへ

2840 地区の初代ガバナーである、故・関口 隆 隆パストガバナー（2000—2001 年度）は、ロータリアンは「他律から自律への自己改造」を行うべし、といつも語っておられました。先輩の教えや指示に従うだけの他律的な生き方から、ロータリーの理念や組織のルールを得心した上で、主体的にロータリー活動に取り組む自律的ロータリアンに成長する必要があること、そして、先輩ロータリアンは若い会員の「自律」を支援し、存分に能力発揮できるよう導く責務があること、を強調されたのです。

「他律から自律への自己改造」は、クラブにおいても言えることでしょう。公式訪問で地区内クラブをまわって見て意外だったのは、クラブ運営に関して、RI や地区の指示を仰いだり、指示を受けてから対応したりしようという、他律的な態度のクラブが少なからず見受けられたことです。RI や地区が提示するロータリー全体や地区全体の理念や実践に関する方向性や重要課題を、どう受け止め何にフォーカスするかは、クラブの意思にかかっています。「希望」は、主体的に考え行動する自律的ロータリアン、そして自律的なロータリークラブが描く未来の中にしかありえません。

誤解してほしくないのは、自律的なロータリークラブは閉鎖的なクラブとは違うということです。クラブの「自治権」を主張するだけで、地区や RI の動向や活動には無関心・非協力的な態度をとる、地域社会に対する奉仕活動も活発とはいえない、そうした「伝統的クラブ」が見受けられます。

地域社会、そして他クラブや地区、RI に開かれたクラブとして交流や相互研鑽を深め、地域における存在価値を高めるとともに、世界的ネットワークであるロータリーの特権を積極的に享受するクラブこそが「希望」をつかむことができるでしょう。

ネットワークの結節点としてのクラブ

ロータリーという組織は可能性に満ちています。情報ネットワークでつなが

った 21 世紀の世界の中で、地域に根ざしたロータリークラブは、新しい共同体の核、新しいネットワークの結節点となることができるでしょう。もちろん、そのためには、自律的クラブ、開かれたクラブであることが前提となります。

本質を問うことから可能性を問うことへ

ロータリーの「奉仕の理念」は人生哲学ですが、可能性追求の哲学でもあります。私は、本稿で様々な角度から「ロータリーとは何か」を語ってきましたが、ロータリーの未来を創ってゆくには「ロータリーとは何でありうるか」、「ロータリーには何ができるか」、「私たちロータリアンは何をなすべきか」を問うことが重要です。

本質を問うことから可能性を問うことへ、私たちの「ロータリーの希望」を探求する旅はこれからも続きます。

あとがき

ガバナー職を務めながらの月信コラム連載は、困難を極めました。毎月締め切りが迫ると血圧が上がりました。しかし、限られた時間の中での執筆は、かえって集中力を高めました。

また、最初は単にロータリー用語の英語原文と邦訳の語義のずれやそれに伴う多くの日本ロータリアンのロータリー理解に対する私の違和感を伝えようと思っていたのですが、ガバナー職を務める日々の思いや各地のロータリアンの皆様との交流、ガバナー職としての様々の得難い貴重な体験が連載の内容や方向を次第に変えてゆきました。

不十分ですが、ロータリーの「奉仕の理念」とその実践についての本質的論議や問題提起を、少しは私なりに示すことができたのではないかと、今は感じています。

今回、連載を PDF にまとめるに際して、全体のタイトルを、『**ロータリーの希望 — 「奉仕の理念」とその実践をめぐる —**』としました。

振り返ってみますと、これまで私は、まえがきでも触れた地区会員増強・退会防止委員会委員長（2003－2004 年）や、ガバナースタッフとして地区副幹事・事務局長（2005－2006 年）を務めた際、あるいはクラブ会長（2010－2011 年）を務めた時も、その年度の終わりにその役職経験から得られたロータリーに関する思いを小論に認めたり、年間のスピーチをまとめたりしてきました。いつ

も、その役職を終えるに当たって“卒業論文”のつもりで書いてきたのです。

今回も同様の気持ちでまとめています。過去に執筆したロータリー論と内容やモチーフは共通することも多く、いわばそれらの「変奏曲」と言ってもよいのですが、ガバナー職を務める中での実感や思いを込めながら執筆した本稿の内容・主張については、以前より確信に満ちた気持ちを持っています（単に私の「誤解」かもしれませんが）。

私が言い続けてきたのは、「ロータリーの力」、そして「言葉の力」を信じようということです。言葉は危ういものです。人を正しく導くこともできれば道を誤らせることもできます。心を動かすこともできれば惑わすこともできます。

しかし、私たちが、正しく問い正しく考えることを怠らなければ、ロータリーの言葉は、これからも私たちによりよく生きる力を齎し続けるでしょう。

月信連載中、励ましの言葉をかけていただいた皆様に御礼申し上げます。『ロータリー文庫通信』に何度か採りあげられたおかげで、全国の熱心な読者からも励ましのお言葉をいただくことができました。

また、同期のガバナーの皆様とは、ガバナー会や全国規模のセミナー、そして各地の地区大会でお会いする機会が多かったのですが、そのたびに交わしたロータリー談義が、本稿執筆のヒントや原動力になりました。

「源流の会」や RLI での交流を通じて啓発された全国の素晴らしいロータリアンの皆様に御礼申し上げます。特に、第 2650 地区 敦賀ロータリークラブの刀根 荘兵衛氏には、いつも最新の正確なロータリー情報を提供していただき、また面倒な議論にもお付き合いいただき、感謝しています。

私が所属する前橋ロータリークラブの曾我 隆一パストガバナーには、私がガバナー職を全うできるようにと、心強い後ろ盾となっていただきました。本稿の主題である「奉仕の理念」に私が注目するようになったのも、曾我パストガバナーのアドバイスがきっかけでした。コラム連載中、毎回熱心に読んでいただき、貴重なコメントをいただき、ありがとうございました。

私の人生に大きな変化と豊かな彩りを与えてくださった、すべてのロータリアンの皆様の友情、“Fellowship” に心より感謝申し上げます。

“Engage Rotary, Change Lives !”

プロフィール

氏 名：本田 博己（ほんだ ひろき）
所 属：国際ロータリー 第 2840 地区
前橋ロータリークラブ
職業分類：乳製品販売



《略歴》

1950 年（昭和 25 年）3 月生
住 所：群馬県高崎市井野町 3 5 2 - 1 6
職 業：群馬ヤクルト販売株式会社 代表取締役会長
E-mail：honda@gunma-yakult.co.jp

《ロータリー歴》

〈クラブ〉

1996 年 5 月 前橋ロータリークラブ入会
2001 年 - 2002 年 幹事
2010 年 - 2011 年 会長

〈地区〉 RID2840

2003 年 - 2004 年 地区 会員増強・退会防止委員会 委員長
2005 年 - 2006 年 曾我隆一ガバナー年度 地区副幹事・事務局長
2007 年 - 2009 年 地区 管理運営委員会 委員長
2008 年 - 2010 年 地区 研修委員会 委員
2011 年 - 2012 年 地区 研修委員会 委員・ガバナーノミニ
2012 年 - 2013 年 ガバナーエレクト
2013 年 - 2014 年 ガバナー

〈全国〉

2013 年 - ロータリー・リーダーシップ研究会 (RLI) 日本支部 カリキュラム委員
// ファシリテーター

ポール・ハリス・フェロー (マルチプル)
ベネファクター、メジャードナー (M1)
米山功労者 (マルチプル)

《これまでに発表したロータリー論》

『会員増強』とは『組織強化』である (森田年度月信 2004 年 6 月号 vol.12)
「サービスの哲学としてのロータリー理念」(曾我年度月信 2006 年最終号 vol.13)
『ロータリーの基本 ～研修の手引き～』(PDF 地区ウェブサイト 2009 年 9 月 -)
『ロータリーの力 ～会長の時間抄録～』(PDF 2011 年 7 月)

ロータリーの希望

—「奉仕の理念」とその実践をめぐって—

2014年6月16日

本田 博己 (ほんだ ひろき)

国際ロータリー第2840地区
前橋ロータリークラブ